

第3回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

開催日 令和4年12月27日（火）

場所 石川県庁 1109 会議室およびオンライン会議

会議結果（主な意見）

《二の丸一帯の整備・利活用の方針》

- ・御居間先についても、整備の対象として検討をすすめるべき。
- ・橋爪門から御殿への動線について、枡形や雁木坂の扱いについて今後検討が必要。
- ・奥向下段の往時の姿や変遷について、丁寧な解説を行う必要がある。

《埋蔵文化財確認調査》

- ・整備にあたっては、確認された遺構の保護を確実に行ってほしい。

《復元設計、基本図》

- ・往時の姿を示すものとして、絵図・文献、発掘調査成果等の根拠に基づく精緻な検証がなされている。

《障壁画の再現検討》

- ・構図の検討とともに、今後、和紙など材料の選定についても検討する必要がある。

会議資料（抜粋）

- ・別紙

第3回 金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会

時：令和4年12月27日（火） 13：30～16：00

於：石川県庁 第1109会議室

次 第

1 開会 開会挨拶

2 議事

（1）報告事項

（2）取り組み状況

- | | |
|------------------|---------|
| ・ 二の丸一帯の整備方針、利活用 | 【説明資料1】 |
| ・ 埋蔵文化財調査 | 【説明資料2】 |
| ・ 復元設計・基本図 | 【説明資料3】 |
| ・ 障壁画の再現検討 | 【説明資料4】 |

（3）その他

3 閉会

二の丸一帯の整備・利活用の方針

令和4年12月27日

石川県

3. 二の丸御殿の復元整備

二の丸一帯の整備方針

1 保存活用計画における位置づけ

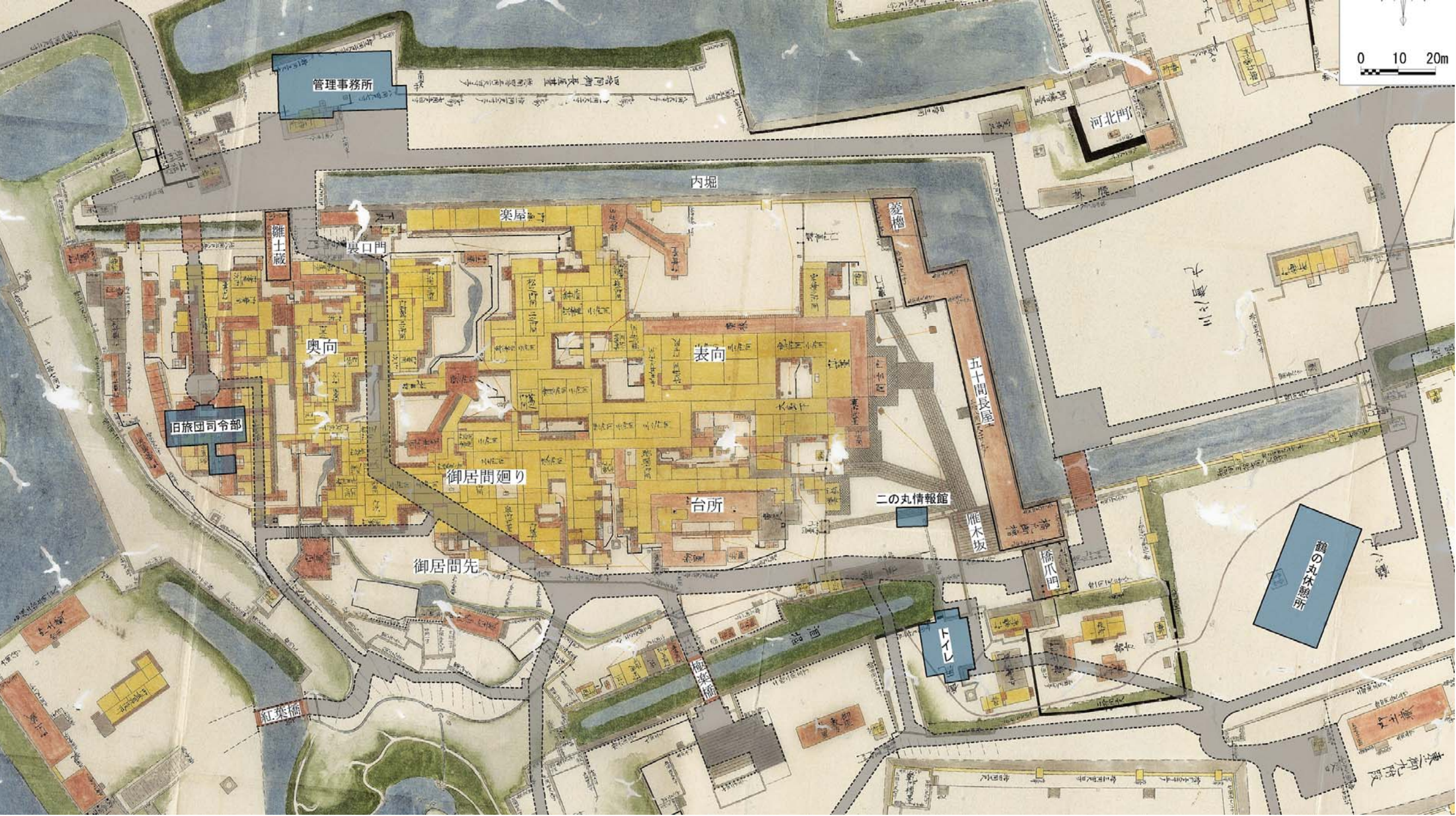
保存活用計画では、往時の二の丸の範囲一帯を「二の丸地区」とゾーニングし、その整備について、「御殿を中心とした金沢城の中核となる場所であり、史実性の高い復元を進めることが史跡への理解を深める上で大きな意義を持ち、観光誘客や賑わいの創出、伝統的建造技術や伝統工芸技術の伝承など、多面的な効果が期待できる」という方向性を示している。また、整備にあたっては江戸期の遺構の保存状態を確認しつつ、その保存を大前提とした整備を検討することとしている。

2 往時の二の丸の姿

往時の二の丸はその大部分を御殿の建物が占めていたが、橋爪門の二の丸側に設けられた枡形から雁木坂（階段）を経て御殿に至る石畳の動線や、御居間廻りの南側に広がる御居間先と呼ばれる藩主の私的な庭、辰巳用水を水源とし建物の間を縫うように配された流れなど特徴的な外構が、御殿と一体的に構成されていた。

復元整備事業においては、これらの外構についても御殿と一体となった屋外空間と捉え、建造物復元に合わせ往時の二の丸の理解に資する整備を行う。

江戸後期の二の丸を描いた絵図に、現況の園路や施設等を重ねた図



御城中巻分基絵図（部分）横山隆昭家蔵

屋外空間の整備にあたっては、利用者に対するバリアフリー、災害時の緊急車両通路の確保、復元建造物利用者への案内機能の確保、植生の保全など諸課題への対応を踏まえ、十分な検討のもと計画する。

建造物の復元に先行して取り組む範囲は前述のとおり「表向」の主要部とし、往時の御殿空間を体感できるよう、史料等に基づく史実を尊重した復元を行う。

「表向」に属する「台所」や、「御居間廻り」、「奥向」の上段部については、当面は建造物の復元を行わず、比較的平坦な土地であることから、絵図等に基づく表示整備を中心とした整備を行う。

また、「御居間先」や「雁木坂」周辺については、今後の調査結果等を踏まえ整備方針を検討することとし、埋蔵文化財調査や、復元整備と遺構との関係など史実の解明及び整備に向けた検討を進める。

奥向 (下段)
現状を維持

奥向 (上段)
表示整備

表向 (主要部)
復元整備

表向 (台所)
表示整備

御居間廻り
表示整備

御居間先
調査結果を踏まえて検討

菱槽

五十間長屋

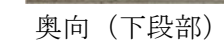
二の丸情報館

雁木坂周辺
調査結果を踏まえて検討

橋爪門 続槽

橋爪門

二ノ丸地区



埋 蔵 文 化 財 調 査

令和4年12月27日

石 川 県

（1）発掘遺構（第1段階）

① 既往の発掘調査等【第1図・第1表・第2図】

a ニノ丸御殿の発掘調査

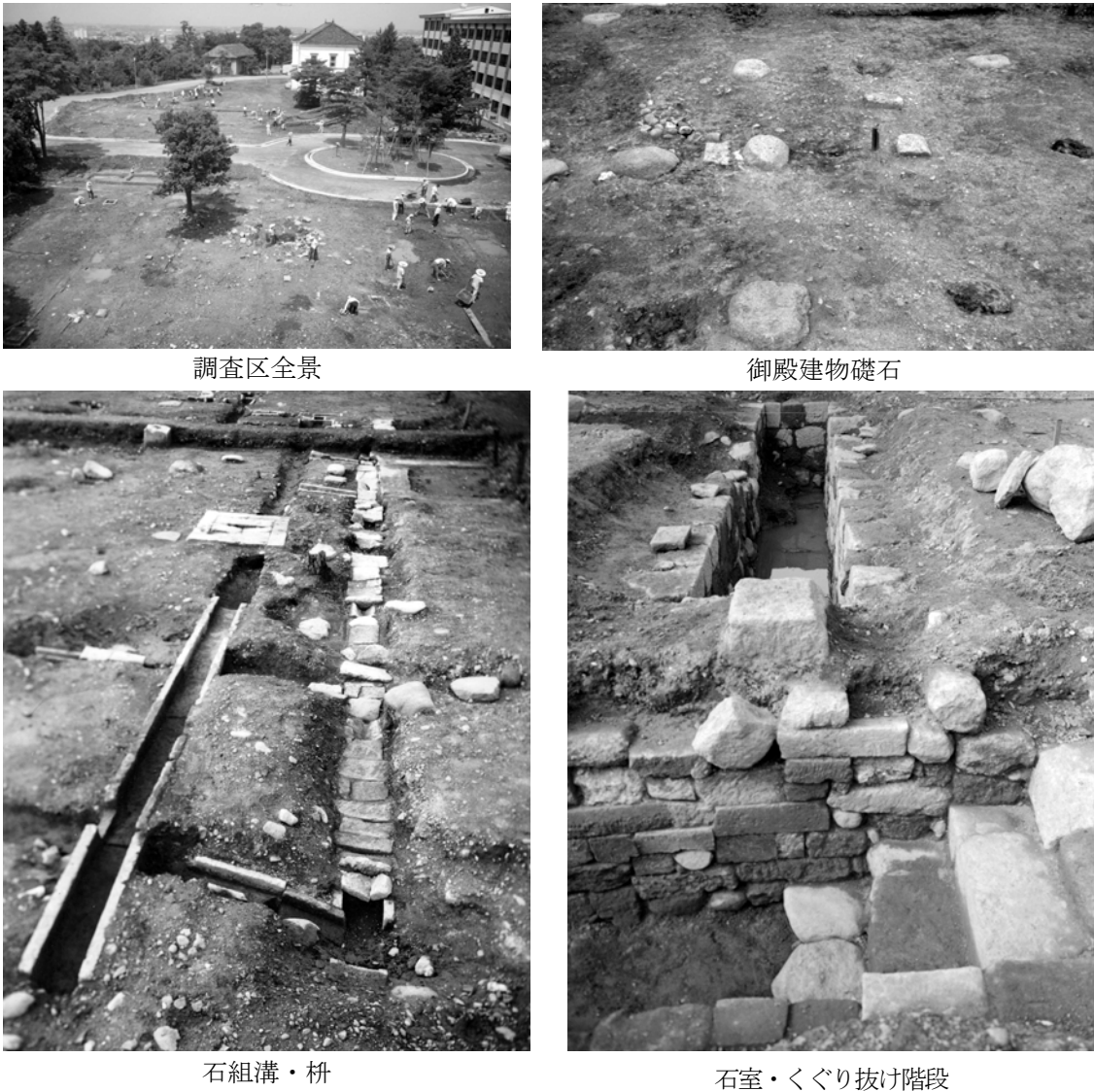
- ・昭和 43・44 年（1968・69）、金沢城学術調査委員会がニノ丸御殿表向・御居間廻に相当する部分について確認調査を実施した。御殿にかかる礎石や石組排水溝、石室、潜り抜け階段等を検出した。
- ・昭和 52 年（1977）、金沢大学考古学研究室がニノ丸西側の数寄屋屋敷を対象に学術調査を行い、広式～部屋方の礎石を検出した。
- ・平成 11・13 年（1999・2001）、財団法人石川県埋蔵文化財センターがニノ丸西部・数寄屋屋敷を対象に遺構保護を目的とした確認調査を行い、礎石・階段・石垣等を検出した。このほか平成 24・27・28・令和元年には金沢城調査研究所がボーリング調査を実施し、旧地形や造成の状況についての情報を得た。
- ・令和 2 年（2020）よりニノ丸御殿の復元整備に係り確認調査を実施している。

b 御殿周辺の発掘調査

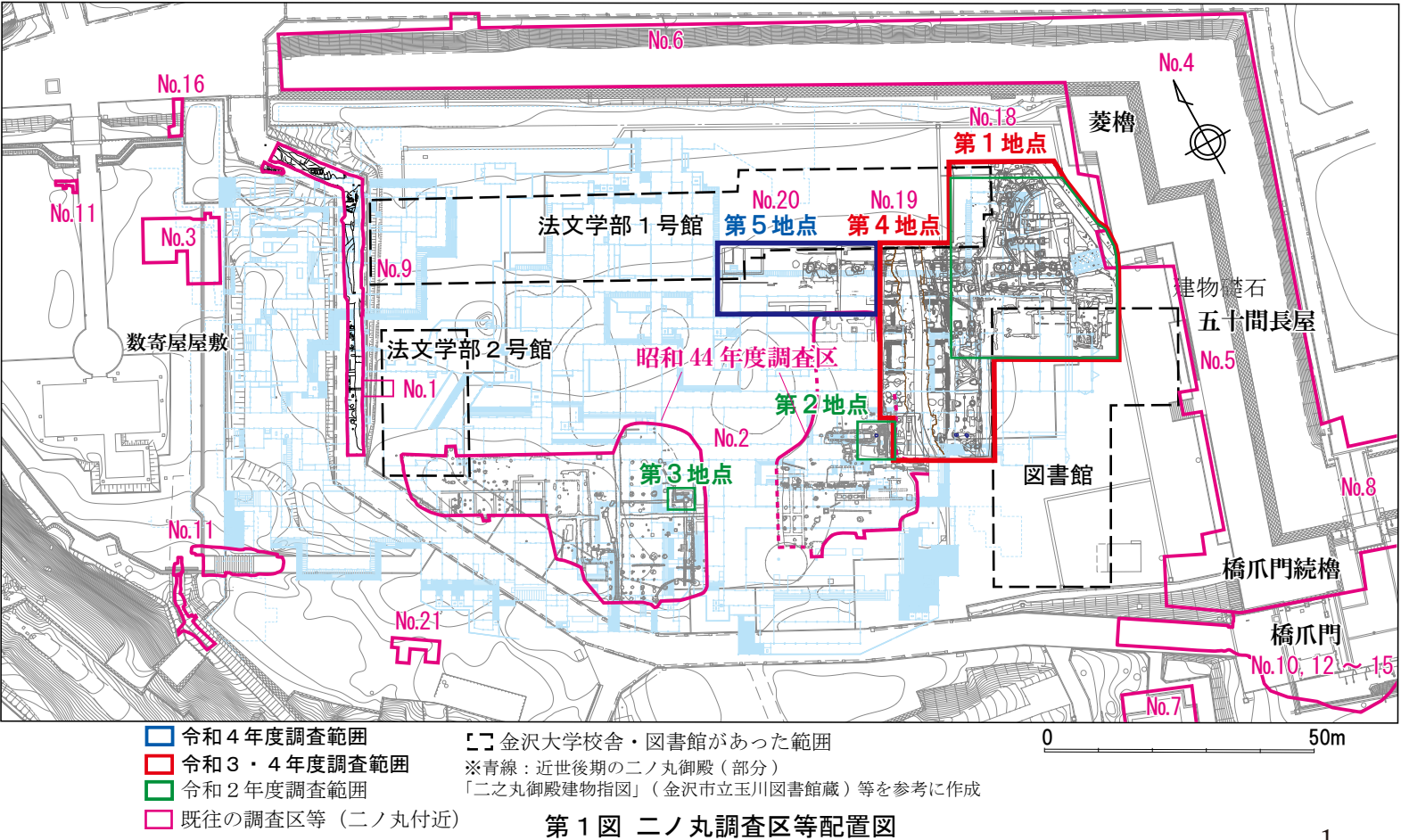
- ・ニノ丸内堀・菱櫓・五十間長屋・橋爪門続櫓等については、平成 9～ 11 年にかけて、財団法人石川県埋蔵文化財センター（平成 9 年まで石川県立埋蔵文化財センター）が発掘調査を実施した。
- ・櫓・長屋の調査では、近世後期再建建物の礎石等を確認し、さらに近世前期に遡る掘立柱礎盤を検出した。櫓（長屋）台石垣の解体調査では、曲輪整備と一体化した櫓（長屋）台の造成状況や、その後の修築過程を明らかにした。また寛永・寛文・宝暦・文化の構築・修築時期ごとの石垣の特徴に関する多くの所見を得た。
- ・橋爪門（二ノ門）については、平成 22～ 24 年に、石川県金沢城調査研究所が発掘調査を実施した。二ノ門の礎石根固め、排水施設である石組溝・石組枡等を検出するとともに、続櫓台石垣に残る添柱の中心を示す鑿切、門下の敷石等の痕跡等を確認した。二ノ門内側ではニノ丸に上がる雁木坂横の石垣台下部、路盤面等を検出した。
- ・令和 4 年（2022）より金沢城調査研究事業の一環として、ニノ丸御居間先確認調査を実施している。

第1表 ニノ丸発掘調査一覧

No.	調査箇所	調査年度	調査主体	調査原因
1	ニノ丸	昭和43(1968)	金沢城学術調査委員会	学術調査
2	ニノ丸	昭和44(1969)	金沢城学術調査委員会 (県教委・金大)	校舎増築
3	ニノ丸	昭和52(1977)	金大	学術調査
4	内堀第1次・菱櫓	平成9(1997)	県埋文センター	公園整備
5	五十間長屋	平成10-11(1998-99)	(財)県埋文センター	公園整備
6	内堀第2次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備
7	鶴ノ丸第1次	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備
8	橋爪門外橋橋脚基礎	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備
9	ニノ丸園路	平成11(1999)	(財)県埋文センター	公園整備
10	鶴ノ丸第2次	平成12(2000)	(財)県埋文センター	公園整備
11	風呂屋口門等	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備
12	橋爪門枡形	平成13(2001)	(財)県埋文センター	公園整備
13	橋爪門	平成22(2010)	金沢城調査研究所	公園整備
14	橋爪門	平成23(2011)	金沢城調査研究所	公園整備
15	橋爪門	平成24(2012)	金沢城調査研究所	公園整備
16	数寄屋屋敷北	平成29(2017)	金沢城調査研究所	保存目的調査
17	ニノ丸（予備調査）	令和元(2019)	金沢城調査研究所	公園整備
18	ニノ丸	令和2(2020)	金沢城調査研究所	公園整備
19	ニノ丸	令和3(2021)	金沢城調査研究所	公園整備
20	ニノ丸	令和4(2022)	金沢城調査研究所	公園整備
21	ニノ丸御居間先	令和4(2022)	金沢城調査研究所	保存目的調査



第2図 昭和44年の発掘調査（No. 2）
（金沢大学考古学研究室提供）



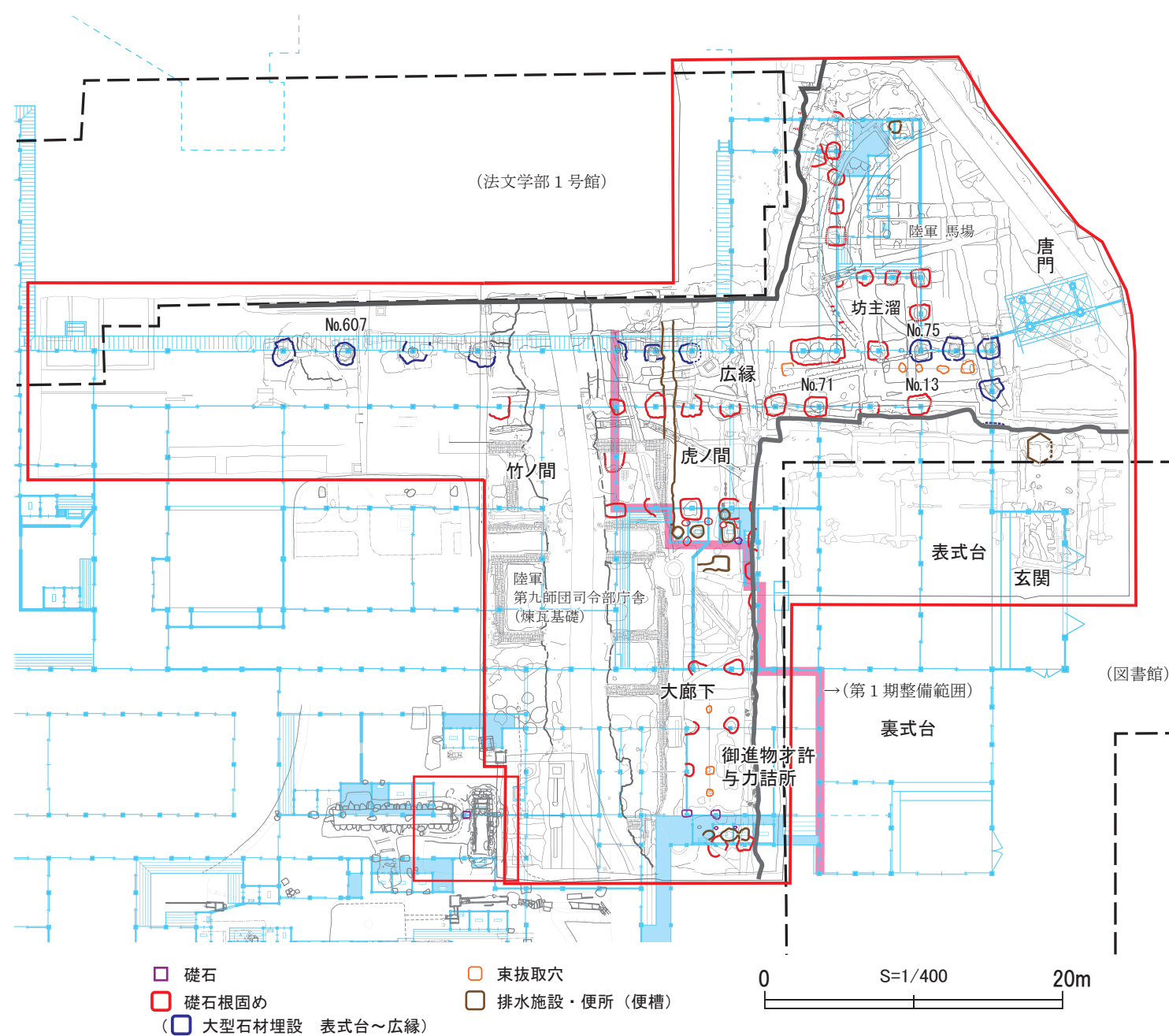
第1図 ニノ丸調査区等配置図

②概要【第3図～第5図】

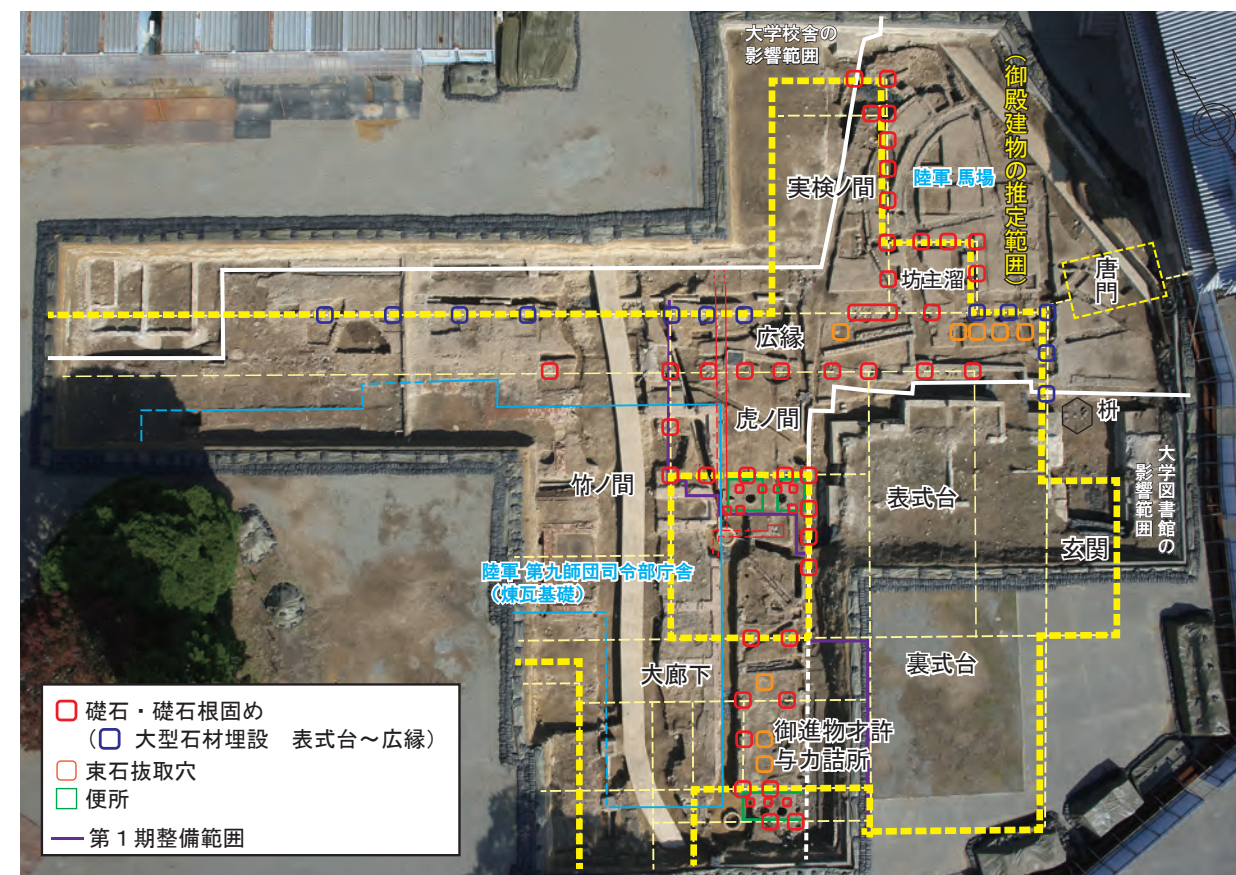
・令和2～4年度にかけて、式台北・実検ノ間・虎ノ間・広縁（第1期整備範囲）等を対象に調査を実施した結果、大学施設等により失われたものを除き、江戸後期の御殿建物の主要な柱を支える礎石根固めを確認した。

・これらは表式台から虎ノ間・竹ノ間へと延びる広縁両側、虎ノ間の西～南側、実検ノ間及び坊主溜にかけての柱列に対応しており、御殿北東部の建物の位置が特定された。

※第1期整備範囲の柱数92本（二ノ丸御殿建物指図参考）のうち、礎石根固めにより柱位置を特定した箇所42、金沢大学校舎等で削平されている箇所50。



第4図 遺構平面図



第3図 調査区平面 垂直写真



第5図 遺構と絵図との照合

③礎石根固めの種類と礎石の形状【第6図】

・表式台から広縁にかけての礎石根固めには、大型石材を埋設するタイプと、川原石等を充填するタイプとが認められる。

・大型石材埋設タイプ

- ・幅 1.2 ～ 1.4m、深さ約 1 m の穴に、上面を平坦に均した 1 辺 50 ～ 90cm 前後の大型石材（戸室石）1 石を据え置き、周囲を土と川原石で充填する。
- ・広縁北側等の建物の外周に位置しており、建物外から見えるため、規格的な切石材の礎石が置かれたと考えられる。抜取穴（No.75）の状況から、礎石の大きさは 1 辺 40cm のサイコロ状と推定される。

・川原石充填タイプ

- ・同じく幅 1.2 ～ 1.4m、深さ約 1 m の穴に、川原石や戸室石・凝灰岩の割材を充填する。
- ・建物内側に位置する。礎石抜取穴底面が傾斜する事例（No.71）からは、下面が不定形な礎石の形状が推定され、規格的ではない礎石が用いられていたことがうかがえる。

④絵図との整合性【第4図・第5図】

・礎石根固めの間隔は、「二之丸御殿建物指図」に記載された柱間寸法と整合しており、絵図記載値の信頼性が検証された。

⑤礎石上面の高さ【第7図・第8図】

・礎石が置かれる大型石材の上面高は、東側（式台側）が低く、西側（竹ノ間側）が高い。礎石上面のレベルは水平ではなく、地面の傾斜を反映して高低差があったと推定される。

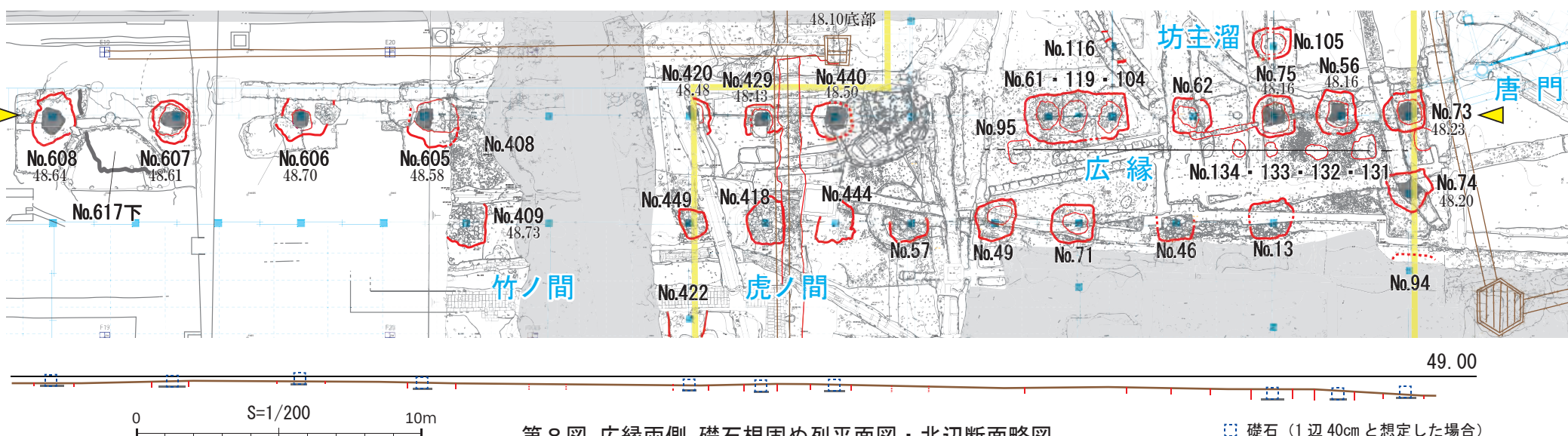
式台周辺 48.16 ～ 48.23m (No.56・73 ～ 75)

虎ノ間周辺 48.43 ～ 48.50m (No.420・429・440)

竹ノ間周辺 48.58 ～ 48.70m (No.605 ～ 608)



第7図 広縁両側 礎石根固め列（写真右側が五十間長屋）



第8図 広縁両側 礎石根固め列平面図・北辺断面略図

【大型石材埋設タイプ】



No.607

【川原石充填タイプ】



No.13 断面



No.75 礎石抜取穴

礎石は、抜取穴内部の大きさ（39 cm）から 1 辺 40 cm 程度の規格的な切石材と推定



No.71 礎石抜取穴

抜取穴下部がやや傾斜していることから、礎石下面は不定形であったと推定

第6図 礎石根固め

⑥束石【第9図・第10図】

・広縁東部と、大廊下から御進物才許与力詰所にかけての2箇所、礎石根固め列と平行する束石の抜取穴と考えられる小穴列を確認した。



第9図 No.95 束石（方形の戸室石）



第10図 No.131-134 束石抜取穴

⑦便所・排水施設【第11・第12図】

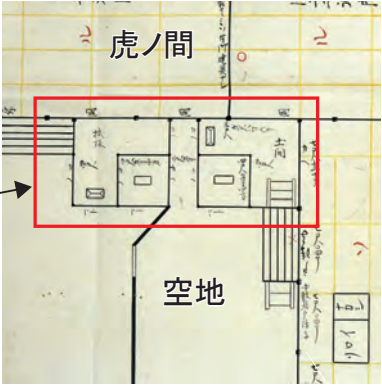
- ・虎ノ間南側の空地、御進物才許与力詰所南側で、「二之丸御殿建物指図」に描かれる便所（閑所）の遺構を検出した。土坑内部は砂で埋められており、明治14年（1881）火災以後に廃絶したと考えられる。
- ・虎ノ間から中庭状の空地にかけて、凝灰岩の石樋・枡で構成される排水施設を確認した。また式台北側で平面六角形の枡を確認した。

⑧普請作事に関わる遺物【第13・第14図】

- ・後期御殿の下層から、前期御殿に伴う飾金具（釘隠）が出土した。焼損し付着物等により表面の装飾は不明であったが、X線CTスキャンによる画像分析で花菱文様を確認した。後期御殿の内外装を記録した『内装等覚』には表向（式台腰板・唐門左右塀・塀重門扉）の外装に類品の絵形が認められ、前期の意匠が後期にも受け継がれていることが判明した。
- ・礎石抜取穴の埋土から、四半敷の敷石（戸室石製）の部材が出土した。一辺約60cm（2尺）を測る。



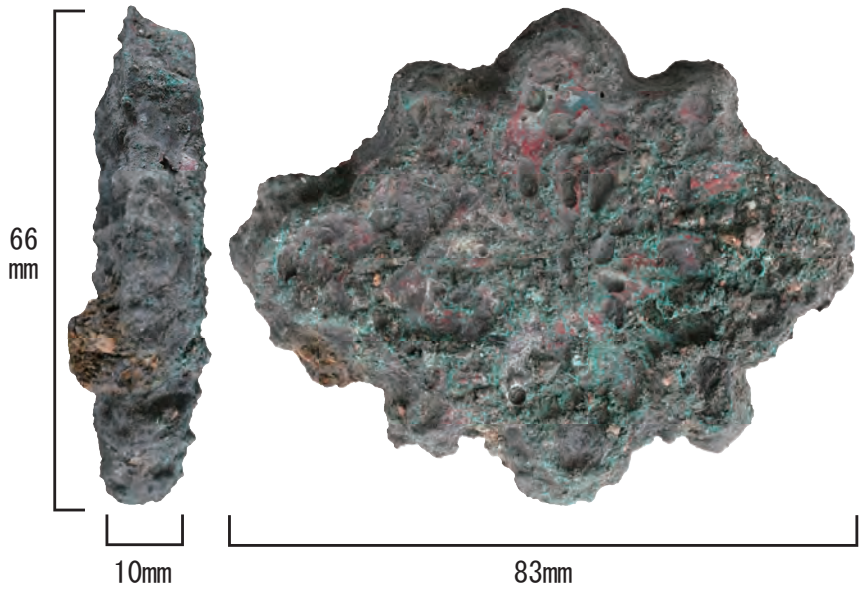
第11図 虎ノ間南側の便所遺構



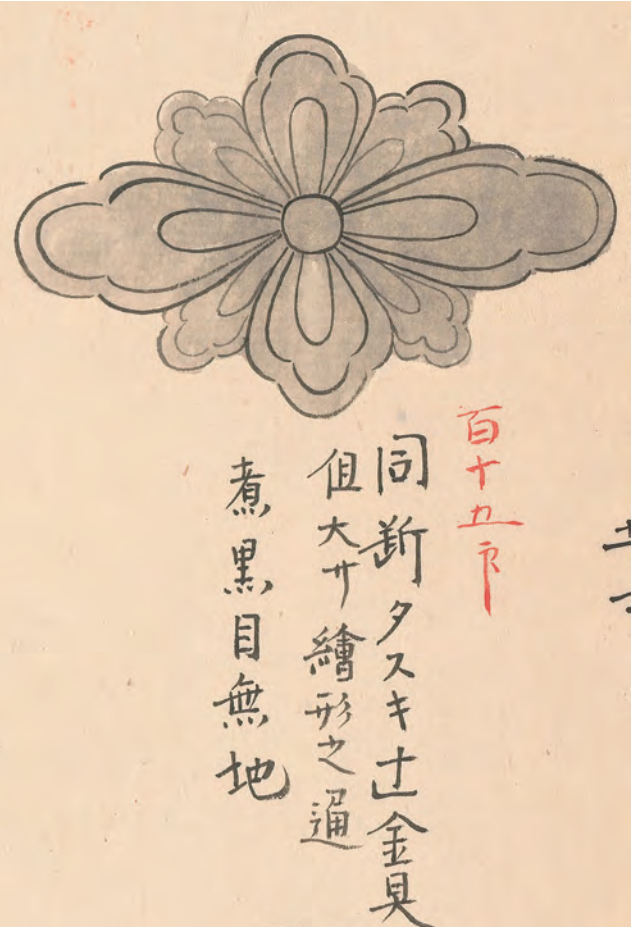
「二之丸御殿建物指図」（部分・加筆）
金沢市立玉川図書館蔵



第12図 排水施設（石樋）



第13図 出土した釘隠

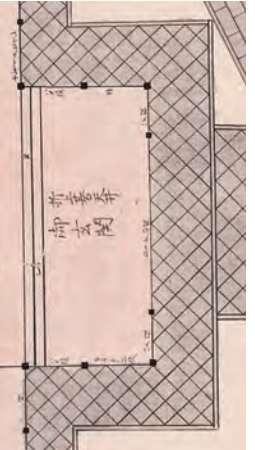


釘隠絵形

「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」（部分）
金沢市立玉川図書館蔵



第14図 敷石（戸室石製）



式台廻り敷石



四半敷 敷石の事例
（旧津田玄蕃邸）

「金沢城二の丸地図」（部分）
石川県立歴史博物館蔵

⑨近代の遺構【第15・第16図】

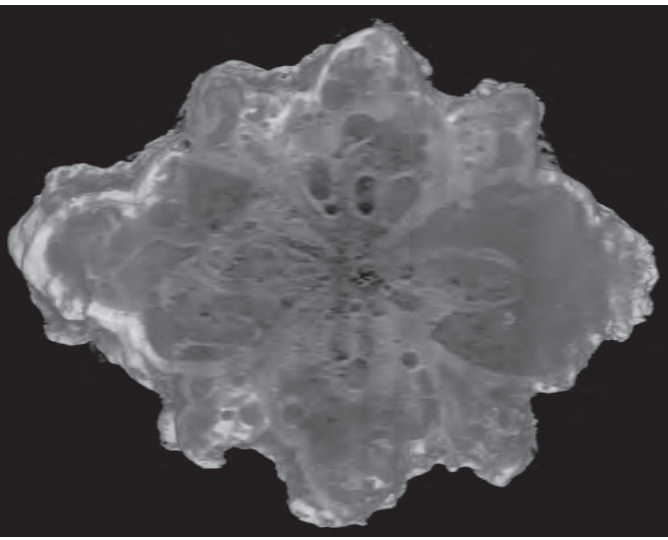
- ・後期御殿の上面で、旧陸軍第九師団司令部庁舎の煉瓦基礎や、馬場の遺構等を確認した。



第15図 第九師団司令部庁舎煉瓦基礎



第16図 馬場跡・会議室基礎



X線CT画像

京都国立博物館撮影

復元設計・基本図

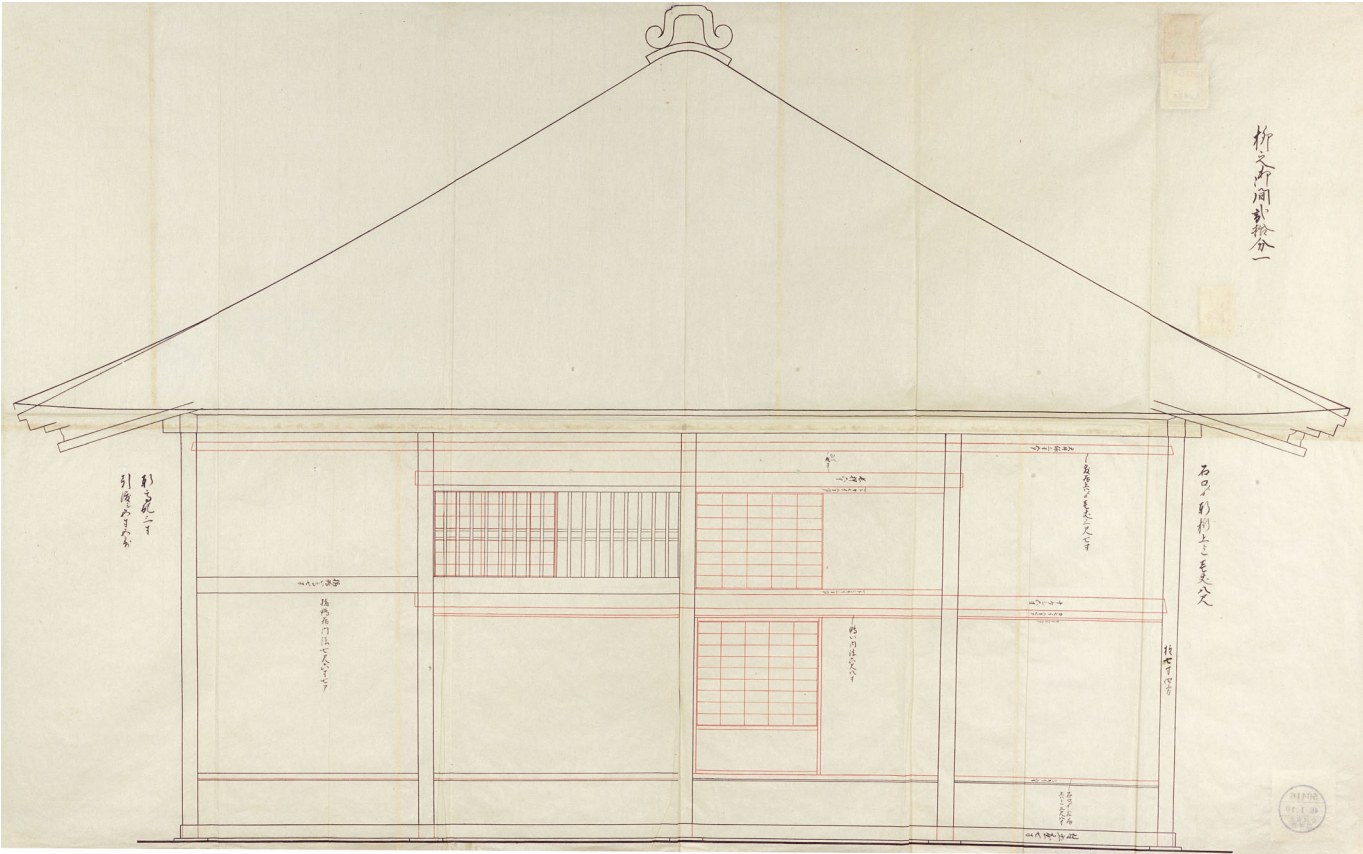
令和4年12月27日

石川県

（2）史料等の調査

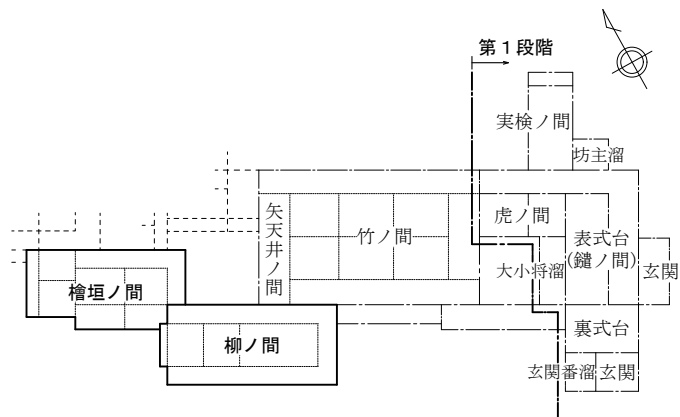
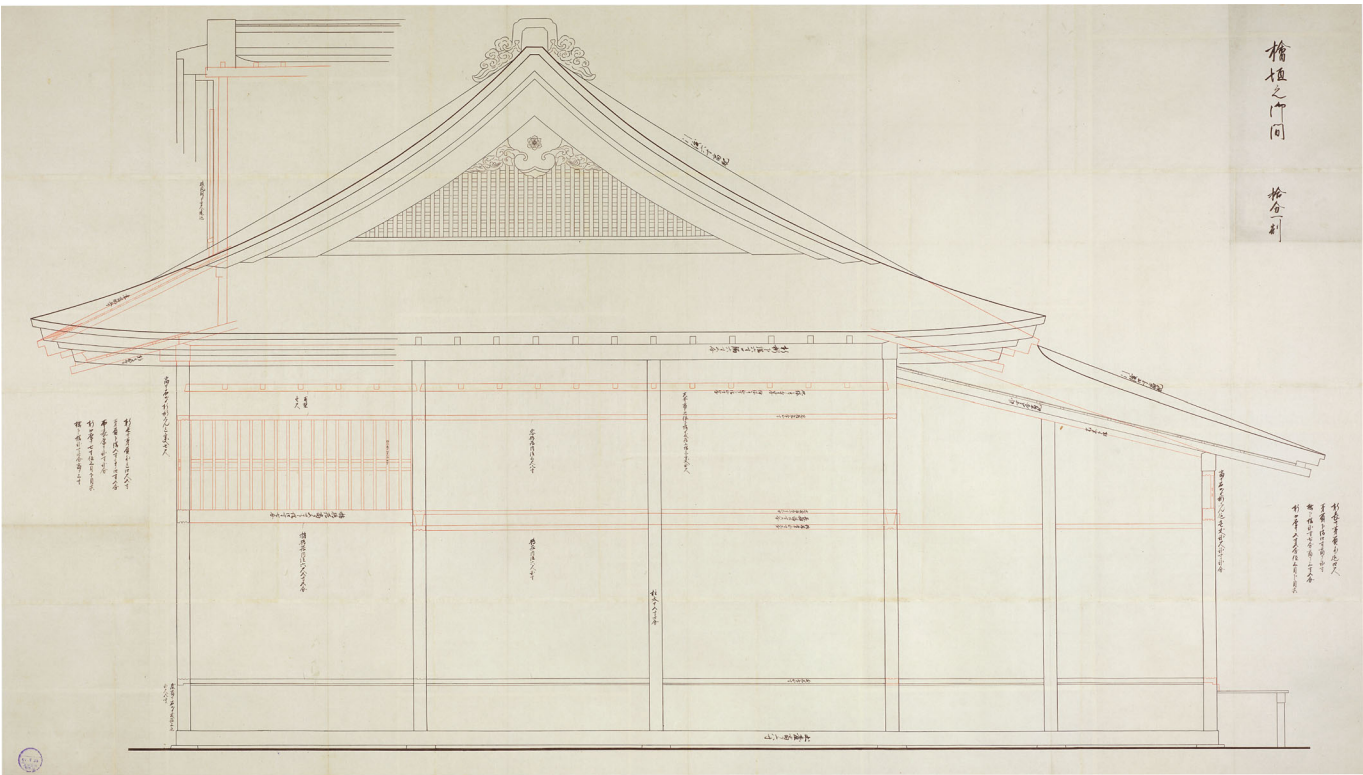
「柳之御間之図（二十分一）」（金沢市立玉川図書館）

表向の柳ノ間について、西側面を描いたと考えられる絵図。内部や東側面の姿も重ねて描かれ、部材寸法や高さ方向の寸法の記載も含め参考とする。



「檜垣御間絵図（十分一）」（金沢市立玉川図書館）

表向の檜垣ノ間について、西側面を描いたと考えられる絵図。内部や東側面の姿と合わせて、妻の断面や軒先も描かれ、部材寸法や高さ方向の寸法の記載も含め参考とする。



文献

二の丸御殿関連の主な文献（8点）について、以下に示す。

①「御造営方日並記」

文化5年（1808）の火災で焼失した二の丸御殿の再建を担当した造営奉行高畠厚定の日記である「御造営方日並記」（金沢市立玉川図書館所蔵）に、御殿の建物や内部意匠、造営に携わった職人等に関し詳細な記録が書かれている。

平成16年（2004）、同17年（2005）に「金沢城史料叢書1（上巻）、同2（下巻）」として翻刻されている。（金沢市立玉川図書館加越能文庫）

②「二ノ御丸御造営留帳」

藩の年寄本多家に仕えた紙細工人細工人才紀甚右衛門が記した、文化6年（1809）から翌7年にかけての留帳。（個人蔵）

③「肝煎幸蔵諸事留」

金沢町肝煎を勤めた、幸蔵（?～1817）の留帳で、造営方主附の任にあった文化6年5月から7月の2ヶ月間の記述がある。（個人旧蔵）

④「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」

江戸後期に再建された二の丸御殿の造作や装飾の仕様を記録したもので、内外装の部分仕様を記すと共に、唐紙等の見本や飾金具の図面を伴う。（金沢市立玉川図書館加越能文庫）

⑤「先祖由緒井一類附帳」（篠田義十郎・山上久男）

いずれも、藩の御大工をつとめた篠田義十郎や山上久男が明治3年(1870)に士族方に提出した先祖由緒帳。（金沢市立玉川図書館加越能文庫）

⑥「清水又十郎相続以来二ノ丸造営其他主付御用の時拝領目録」

藩の御大工清水又十郎が文化期の造営以降御用をつとめ、拝領物があつた際の覚書。（金沢市立玉川図書館清水文庫）

⑦「見聞袋群斗記草稿」

藩の広式頭などを勤めた赤井伝右衛門が明治20年代にまとめた覚書。（金沢市立玉川図書館加越能文庫）

⑧「雑留帳」

御大工清水家に伝来した覚書で、明治初年の藩内の動きなどにも言及する。（金沢市立玉川図書館清水文庫）

⑨「二之御丸御殿御造営御間之内細見」

「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」のベースになった史料とみられる。（加賀本多博物館）



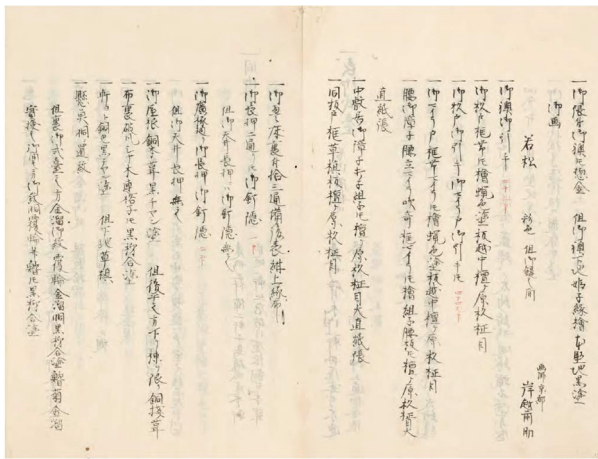
「御造営方日並記」（金沢市立玉川図書館所蔵）

「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」（金沢市立玉川図書館）

平成31年に玉川図書館「加越能文庫」に所蔵される「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」が確認された。江戸後期の二の丸御殿再建に携わった御大工井上庄右衛門が御殿の再建直後の文化8年（1811）に造作仕様を記録したもので、内外装の仕様を詳細に記すと共に、唐紙等の見本や飾金具の図面を伴い、御殿の仕様や材料の詳細に関する情報が得られる。



計4冊からなる冊子



仕様が記載された部分

張付・襖や天井の唐紙他の種類と使用位置の一覧、模様唐紙の実物見本、床脇の小襖縁布の実物見本を収録する。



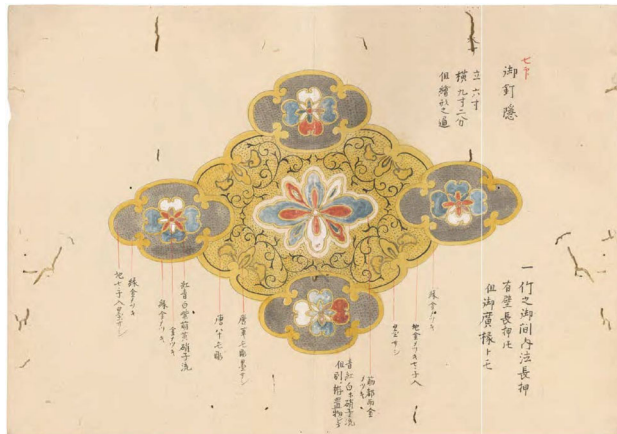
【実物見本】唐紙



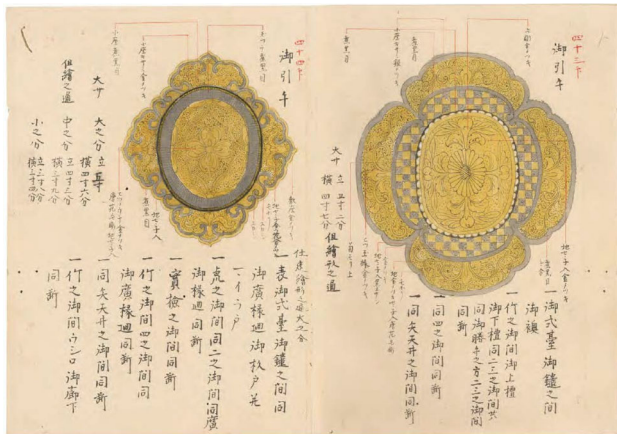
【実物見本】欄小襖の縁布

御殿に取り付けた飾金具の絵形を収録する。

絵形は色彩も含めて写實的に描写し、使用場所・寸法・各部の制作技法を付記する。



【絵形】飾金具（釘隠）



【絵形】飾金具（引手）

（3）復元根拠資料の整理

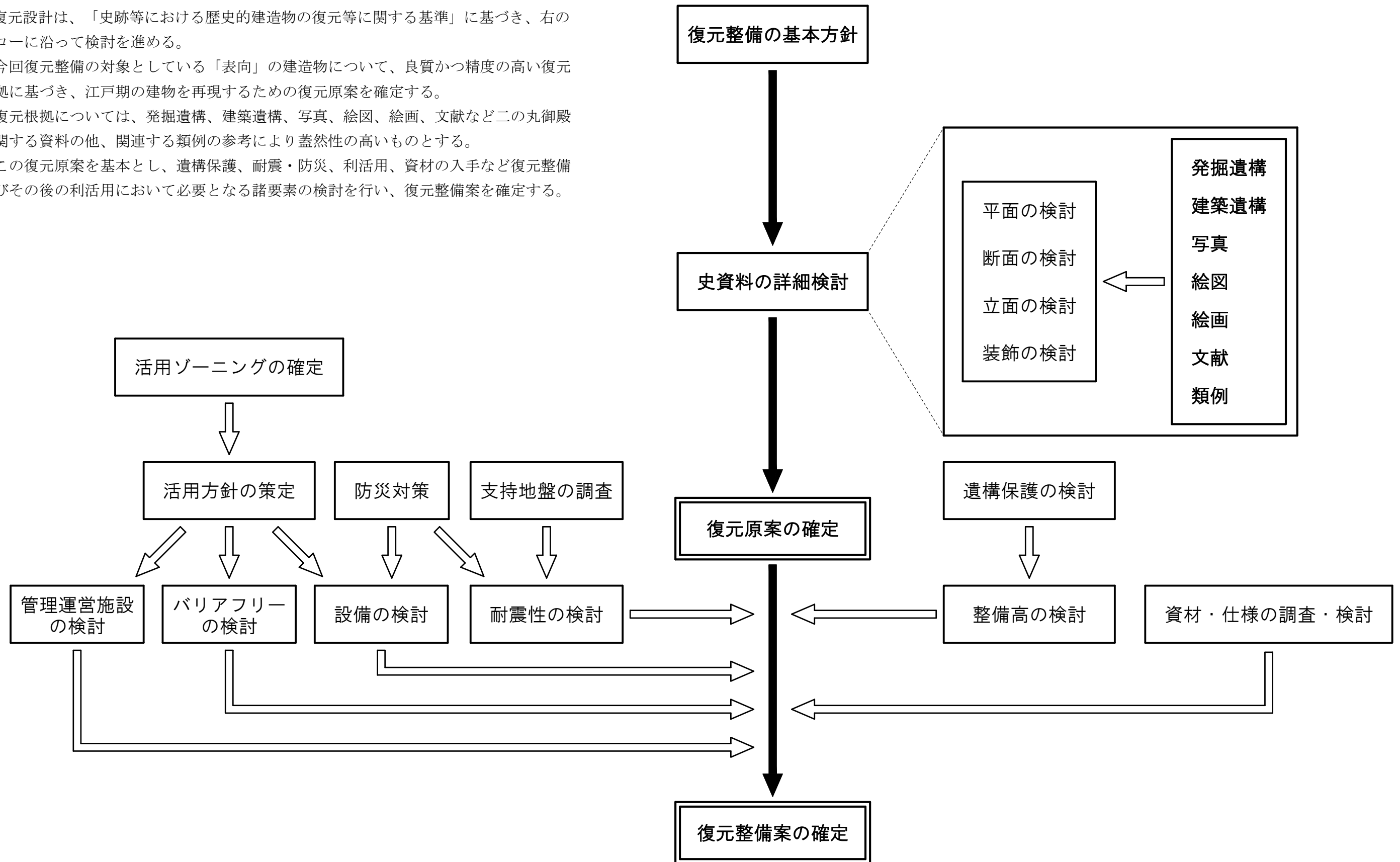
①復元のフローチャート

復元設計は、「史跡等における歴史的建造物の復元等に関する基準」に基づき、右のフローに沿って検討を進める。

今回復元整備の対象としている「表向」の建造物について、良質かつ精度の高い復元根拠に基づき、江戸期の建物を再現するための復元原案を確定する。

復元根拠については、発掘遺構、建築遺構、写真、絵図、絵画、文献など二の丸御殿に関する資料の他、関連する類例の参考により蓋然性の高いものとする。

この復元原案を基本とし、遺構保護、耐震・防災、利活用、資材の入手など復元整備及びその後の利活用において必要となる諸要素の検討を行い、復元整備案を確定する。



②採用資料

金沢城二の丸御殿に関する史資料は数多く残存している。設計を進めるにあたり、根拠として採用する史資料について整理した。一覧を右表に示す。

a. 発掘遺構

令和2年度(2020)から、遺構の遺存状況や内容等を確認するべく発掘調査を実施している。発掘遺構からは、御殿の位置や平面計画を精査しており、調査成果と絵図「二ノ御丸御殿建物指図」が全体的に整合しているとの結果が得られ、当該絵図が精度の高いものであることが検証できた。

b. 建築遺構

表式台玄関脇にあった唐門（現在は尾山神社東神門）と奥能舞台（現在は中村神社拝殿）が城外に移築されている。令和元年度に唐門、令和2年度に奥能舞台の実測調査を実施した。その結果、奥能舞台は明治3年（1870）に移築された際に、小書院下段(表向)の折上格天井を切り縮めて拝殿の天井にしたことが判明した。奥能舞台は御居間廻りの建物であるが、折上格天井は表向の部屋のものであることから形状や部材寸法を参考とする。

c. 絵図

（平面）

御殿の平面を描いた絵図80点のうち、復元する江戸後期を描いたものが63点確認されている。中でも、文化造営直後（文化7～8年頃）の姿を描いたと推定される建物指図は、柱間寸法、天井高、柱間装置等の情報が記載されており、基本図（平面）作成の根拠として採用した。また、建物指図を補足するため、御殿全体の平面の変化を検討する際に抽出された絵図等8点も参考とする。

（立面等）

「金沢城二之丸御式台絵図」は、御殿の表式台から玄関、裏式台の外観を描いたものであり、外観意匠、桁や棟高、柱間装置、装飾等の情報を読み取ることができる。「柳之御間之図」「檜垣御間絵図」は、西側面に内部や東面の姿を重ねて描いたもので、寸法情報の記載がある。3点とも、建物指図の記載と概ね整合していたため、断面や立面の検討において参考とする。「二ノ丸御殿関連史料(竹の間・小書院内装図集)」は部分的ではあるが、内法高や部材寸法の記載があり断面の参考とする。

d. 絵画

「二ノ御丸御広式御居間遠望図」は、二の丸御居間廻り・広式を描いた絵画資料で、表向の直接的な資料ではないものの、柱間装置（腰障子、杉戸、窓遠州狭間）について意匠の参考とする。

e. 文献

「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」（以下、内装等覚）は、江戸後期の御殿再建を指揮した御大工が再建直後の文化8年（1811）にまとめた造作仕様の記録で、部屋ごとに詳細な情報を得ることができる。断面や立面、細部の仕様は内装等覚の情報を最優先に採用する。その他、仕様等の補足として3点の資料を採用する。

f. 類例

上記の史資料だけでは不確定な部分について類例により補完する。御殿と同時期・同種の建造物として、金沢市内の重要文化財成巽閣（文久3年(1863)）、市指定文化財松風閣（天保3年(1832)）、県指定文化財旧津田玄蕃邸玄関（江戸後期）を選定し、構造、柱間装置、細部の部材寸法や納まりを参考とする。金沢城関連の建具遺物とされる帯戸は、細部の部材寸法や納まりを参考とし、併せて成巽閣、松風閣に入る杉戸から引手高さ等を参考とする。また、現存しない同時期・同種の建造物として、江戸城本丸御殿の図面資料（万延度再建時）を選定し、細部の納まり等を参考とする。

資料等	参考内容	所蔵・所在地
a. 発掘遺構		
・ 令和2年度(2020)発掘調査成果	建物礎石及び束石等の位置及び基礎構造等	
・ 令和3年度(2021)発掘調査成果	建物礎石及び束石等の位置及び基礎構造等	
b. 建築遺構		
・ 尾山神社東神門（旧二の丸御殿唐門）	唐門	石川県金沢市
・ 中村神社拝殿格天井	折上格天井形状、格縁寸法	石川県金沢市
c. 絵図		
（平面）		
・ 二ノ丸御殿建物指図	柱間寸法、天井高、柱間装置、仕様他	金沢市立玉川図書館
・ 二の御丸惣絵図（三步碁）	柱間装置	金沢大学附属図書館
・ 金沢城二の丸地図	柱間装置	石川県立歴史博物館
・ 二之丸御殿並御広式下部屋等絵図（表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄）	柱間装置	金沢市立玉川図書館
・ 金沢城二ノ丸御殿御次内巨細絵図	細部部材寸法	金沢市立玉川図書館
・ 金沢御城内外御建物絵図（表向）	柱間装置、外構	(公財)前田育徳会
・ 金沢城二之御丸三步碁図B	柱間装置、屋根（形状、軒の出、仕様）	石川県立図書館
・ 二之丸御殿絵図	細部部材寸法、柱間装置、外構（玄関両脇の桝）	金沢市立玉川図書館
・ 金沢城造営方建図	仕様（唐門両脇塀、塀重門・脇掛塀、二重塀、出窓）	金沢市立玉川図書館
（立面等）		
・ 金沢城二之丸御式台絵図	立面、造作、外構他	金沢市立玉川図書館
・ 柳之御間之図（二十分一）	立面、断面、矩計、部材寸法、造作	金沢市立玉川図書館
・ 檜垣御間絵図（十分一）	立面、断面、矩計、部材寸法、造作	金沢市立玉川図書館
・ 二ノ丸御殿関連史料（竹の間・小書院内装図集）	構造、高さ、柱間装置、造作他	石川県立歴史博物館
d. 絵画		
・ 二ノ御丸御広式御居間遠望図	建具（杉戸、腰障子、窓遠州狭間）	金沢市立玉川図書館
e. 文献		
・ 御造営方日並記	内部意匠他	金沢市立玉川図書館
・ 二ノ御丸御造営留帳	壁、天井等仕様	個人蔵
・ 二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形	建築概要、仕様（天井、床、建具、欄間、長押、金具、唐紙他）、屋根、壁他	金沢市立玉川図書館
・ 二之御丸御殿御造営御間之内細見	建築概要、仕様他	加賀本多博物館
f. 類例		
・ 重要文化財成巽閣	柱間装置、細部納まり他	石川県金沢市
・ 市指定文化財松風閣	柱間装置、細部納まり他	石川県金沢市
・ 県指定文化財旧津田玄蕃邸玄関	柱間装置（菱欄間）	石川県金沢市
・ 帯戸（建具遺物）	細部部材寸法・納まり他	金沢職人大学校
・ 江戸城本丸御殿（図面）	細部部材寸法・納まり他	東京都立中央図書館

③復元根拠一覧表

区分ごとに、根拠となる資料について整理をした。一覧表を以下に示す。

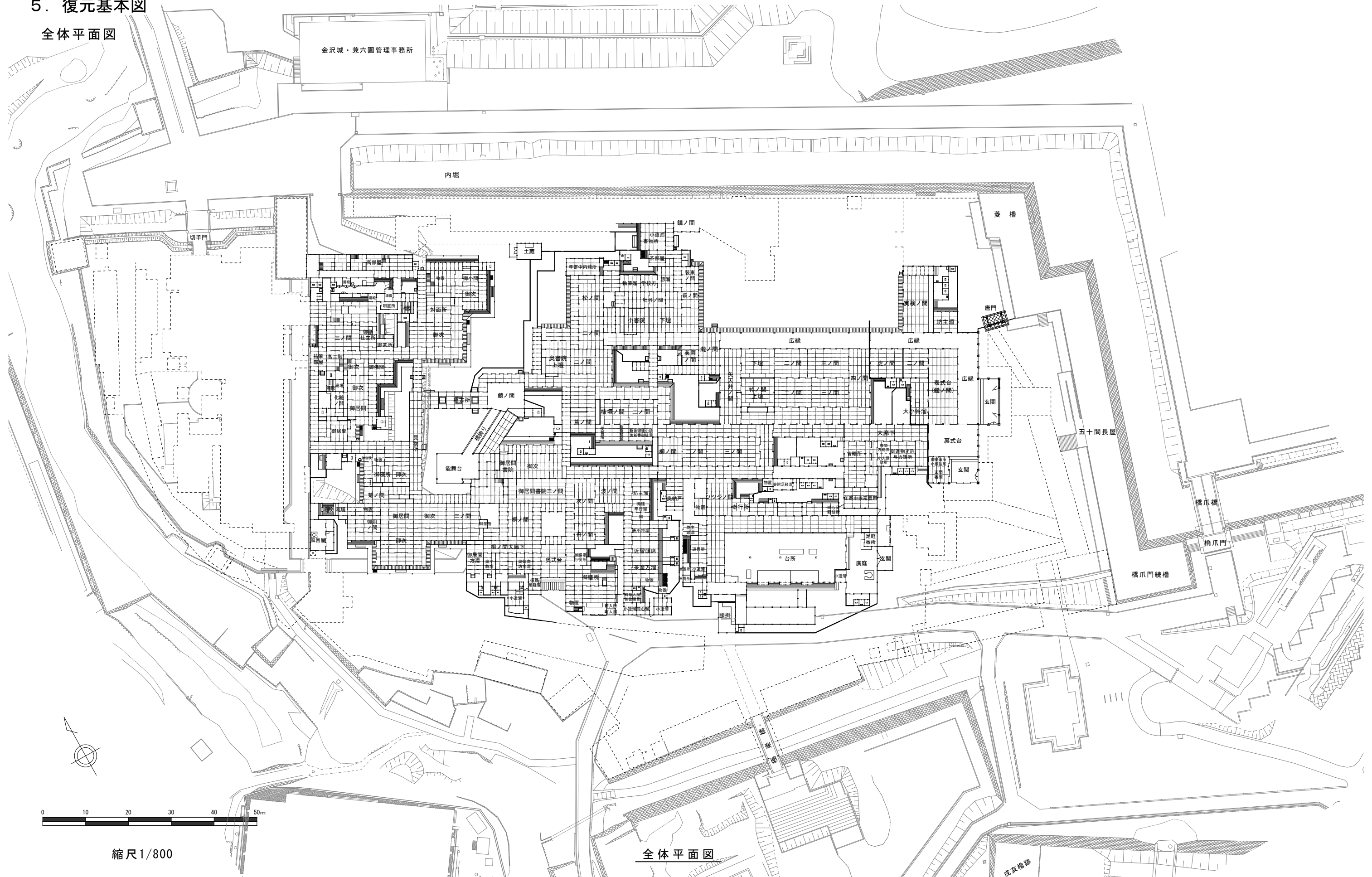
区 分	判明する内容	根拠資料
平 面	・全体規模、柱位置 ・基本寸法 畳割(6 尺 2 寸)	→発掘遺構と「二之丸御殿建物指図」による。 →「二之丸御殿建物指図」による。
立 面	・各面の構成の概要 ・玄関、表式台部分 ・裏式台、玄関番溜部分 ・大小将溜部分 ・虎ノ間部分 ・実検ノ間部分 ・坊主溜部分 ・各妻飾り ・各棟の棟高さと位置、構造 ・屋根の形状 ・屋根葺材、軒樋、仕様	→「二之丸御殿建物指図」、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。 →「金沢城二之丸御式台絵図」(立面)、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「御造営方日並記」による。 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「御造営方日並記」による。 →同上 →同上 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、「金沢城二之御丸三步基図B」(屋根伏)による。 →「金沢城二之御丸三步基図B」(屋根伏)による。 「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「金沢城二之御丸三步基図B」(屋根伏)、「御造営方日並記」を参考にする。
断 面	・床組 ・床高 ・矩計 軒勾配（地垂木勾配） 内法高	→江戸城本丸御殿(類例)を参考にする。 ・表式台玄関中央間は台敷居、裏式台の南面帯戸は台敷居、東面唐戸は地覆、これ以外は付土台。 ・付土台、台敷居、寄敷居の成は、「金沢城二之丸御式台絵図」の分一による。 →「二之丸御殿建物指図」による。 ・裏式台床高 4 尺(礎石天端～床板天端) (裏式台・同玄関の天井高の差3 尺 1 寸、玄関寄敷居9 寸) ・表式台床高 4 尺(裏式台と同高、玄関台敷居9 寸5 分) ・虎ノ間、実検ノ間まで段差なく同高で設定。 →「柳之御間之図」、「檜垣御間絵図」、江戸城本丸御殿(類例)を参考にする。玄関棟は3 寸6 分(二軒、地垂木)、式台棟・虎ノ間棟・実検ノ間棟は3 寸。 →「二ノ丸御殿関連史料(竹の間・小書院内装図集)」、「柳之御間之図」、「檜垣御間絵図」、成巽閣(類例)による。 ・玄関～竹ノ間は7 尺5 寸7 分、柳ノ間は6 尺8 寸。大廊下、大小将溜、玄関番溜、坊主溜は6 尺8 寸で設定。

区 分	判明する内容	根拠資料
	天井高 桁 高 軒の出 ・小屋組 ・屋根勾配（引渡し勾配） ・妻詳細 ・柱の面幅 ・縁	→「二之丸御殿建物指図」による。 寸法の記載がない部屋は、続きの部屋や小屋組から推定。 →「金沢城二之丸御式台絵図」による。 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「金沢城二之御丸三步基図B」(屋根伏)、による。 →江戸城本丸御殿(類例)を参考にする。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、「柳之御間之図」、「檜垣御間絵図」、江戸城本丸御殿(類例)を参考にする。 玄関棟・式台棟は6 寸2 分、虎ノ間棟は6 寸、実検ノ間棟は5 寸7 分。 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、江戸城本丸御殿(類例)を参考にする。 →木割をもとに整理。 ・鴨居幅 = 柱面中 ・長押成 = 柱面内 →飾金具が取り付く柱は、飾金具の寸法から推定。 →「二之丸御殿建物指図」、江戸城本丸御殿(類例)による。 ・切目縁 実検ノ間から虎ノ間・竹ノ間 ・樽縁 虎ノ間後方の空地(大小将溜・竹ノ間四ノ間)、坊主溜から実検ノ間
床、天井	・仕様、寸法 ・表式台玄関の組物 ・折上格天井、格天井 ・棹縁天井 ・張天井 ・虎ノ間広縁、竹ノ間広縁境	→「二之丸御殿建物指図」、「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、江戸城本丸御殿(類例)による。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、(類例)による。 →折上の形状は、中村神社拝殿折上格天井(建物遺構)に倣う。 格縁は、辻金具の寸法、建物遺構を参考にする。 →「柳之御間之図」、「檜垣御間絵図」を参考にする。 →「柳之御間之図」、「檜垣御間絵図」、「御造営方日並記」、松風閣(類例)を参考にする。 →天井長押の高さに無目を入れ蟻壁を通す。 ・竹ノ間広縁 天井長押 7 寸 [蟻壁高さ1 尺] ・虎ノ間広縁 天井長押 6 寸4 分[蟻壁高さ1 尺]
床の間 違い棚 付書院	・全体の構成 ・仕様	→「二ノ丸御殿関連史料(竹の間・小書院内装図集)」を参考にする。 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。
建 具	・全体の構成	→「二之丸御殿建物指図」、「二の御丸惣絵図(三步基)」、「金沢城二の丸地図」、「二之丸御殿並御広式下部屋等絵図(表御式台ヨリ竹之間迄、御台所ヨリ柳之御間迄)」、「金沢御城内外御建物絵図(表向)」、「金沢城二之御丸三步基図B」(平面)、「二之丸御殿絵図」による。

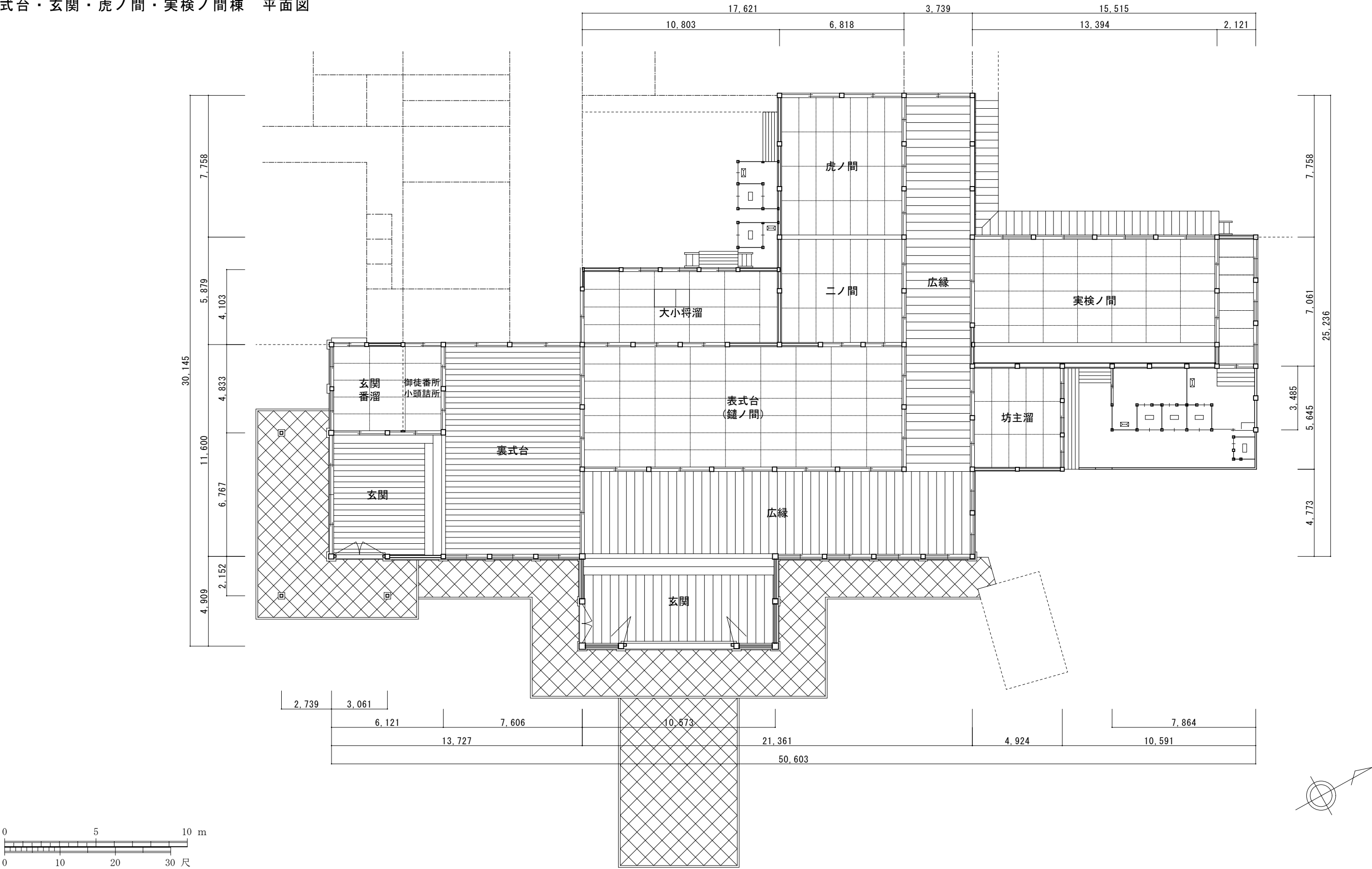
区 分	判明する内容	根拠資料
	・仕様 唐戸 中敷居戸障子 杉戸、舞良戸 捲り障子(外周雨戸)、板戸、 明障子、襖、窓障子 腰障子 狭間・遠州狭間 ・付樋端	→「金沢城二之丸御式台絵図」、「二之御丸御殿御造営内装等 覚及び見本・絵形」、江戸城本丸御殿(類例)に倣う。 →「金沢城二之丸御式台絵図」、成巽閣(類例)を参考にする。 →成巽閣(類例)、松風閣(類例)、舞良帯戸(類例)を参考にする。 →成巽閣(類例)を参考にする。 →「柳之御間之図」、成巽閣(類例)、松風閣(類例)、を参考に する。 →「御造営方日並記」、「柳之御間之図」を参考にする。 →「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「二ノ丸 御殿関連史料(竹の間・小書院内装図集)」を参考にする。
欄 間	・全体の構成 ・仕様	→欄間の画題は「二之丸御殿建物指図」、「二之御丸御殿御造 営内装等覚及び見本・絵形」による。類例を参考に推定復元 を行う。 →表式台玄関の臺股は、「金沢城二之丸御式台絵図」に倣う。 竹の節欄間は、成巽閣(類例)を参考にする。 菱組格子欄間は、旧津田玄蕃邸玄関(類例)を参考にする。
壁	・仕様	→「二之丸御殿建物指図」、「二之御丸御殿御造営内装等覚及 び見本・絵形」による。
塗 装	・仕様	→「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」による。 付樋端は、建具の種類により塗りを設定。
金 具	・仕様、寸法	→「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、(類例)に よる。
外 構	・全体の構成	→「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「金沢城 二之丸御式台絵図」、「金沢御城内外御建物絵図(表向)」、 「二之丸御殿絵図」による。四半敷は敷石の遺物による。
木 材	・材種 ・寸法 「二之丸御殿建物指図」 実検ノ間 柱 表式台～竹ノ間 敷居 「二之御丸御殿御造営内装等覚 及び見本・絵形」 表式台玄関 隅柱	→「二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形」、「御造営 方日並記」による。 書き込まれた部材寸法を参考にする。 →「柱大サ八寸」との記載。 厚さ3寸2分。表式台(鍵ノ間)、虎ノ間、竹ノ間において、 室内と広縁の天井高の差から算出。 一部書き込まれた部材寸法を参考にする。（「金沢城二之丸御 式台絵図」で検証を行った際の部材寸法と近似値を示す。） →「一尺一寸五分」との記載(飾金具絵形)。

区 分	判明する内容	根拠資料
	「二之丸御殿絵図」 表式台玄関 小脇柱 側柱 裏式台玄関 柱 隅柱 底柱 「柳之御間之図(二十分一)」 柳ノ間 柱 付土台 敷居 鴨居、付サイ 長押 指鴨居 窓敷居 窓鴨居 天井縁(廻縁) 軒勾配 引渡し勾配 「檜垣御間絵図(十分一)」 檜垣ノ間 垂木 軒勾配 引渡し勾配 「二ノ丸御殿関連史料(竹の間 ・小書院内装図集)」 竹ノ間 柱 柱(付書院) 鴨居、付サイ 長押 (床框) 壇縁 落掛 「金沢城二ノ丸御殿御次内巨細 絵図」 御居間縁側 柱 鴨居 長押 波ノ間・御居間書院他 鴨居 長押	一部書き込まれた部材寸法を参考にする。（「金沢城二之丸御 式台絵図」で検証を行った際の部材寸法と近似値を示す。） →「大サ九寸六分」との記載。 小脇柱と同幅で設定(小脇柱と同じ金具が取り付けく)。 「柱大サ七寸八分」との記載。式台棟全体で8寸を採用。 「大サ八寸八分」との記載。「金沢城二之丸御式台絵図」と 検証した結果、9寸を採用。 「大サ五寸二分」との記載。 一部書き込まれた部材寸法を参考にする。 →「柱七寸四方」との記載。 「七寸」との記載。 「二寸」との記載。 「二寸七分」、「一寸二分」との記載。 「六寸」との記載。 「七寸」との記載。 「二寸二分」との記載。 「二寸四分」との記載。 「三寸五分」との記載。 「三寸」との記載。 「五寸五分」との記載。 一部書き込まれた部材寸法を参考にする。 →「下端二寸七分高サ三寸五分」との記載。 「三寸」との記載。 「六寸」との記載。 竹之間の部材寸法を参考にする。 →「柱八寸四分」との記載。 「柱大サ五寸六分角」との記載。 「三寸三分」、「一寸一分」との記載。 「七寸」との記載。 「八寸」との記載。 「八寸」との記載。 「六寸二分」との記載。 柱および柱に取り付く部材について、柱幅の比率から一部寸 法を反映する。 →「御柱大サ四寸五分」との記載。 「御鴨居下端四寸一分厚一寸八分」との記載。 「御長押大サ三寸八分ウ子八分」との記載。 →畳割から柱5寸4分の部屋 「御鴨居厚サ二寸三分」との記載。 「御長押大サ四寸五分 御柱ウ子一寸」との記載。

全体平面図



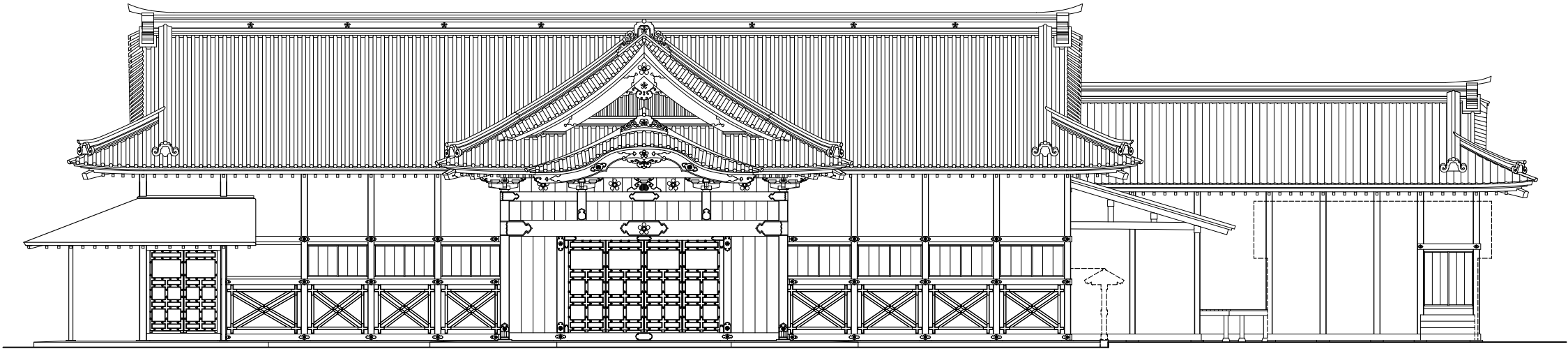
式台・玄関・虎ノ間・実検ノ間棟 平面図



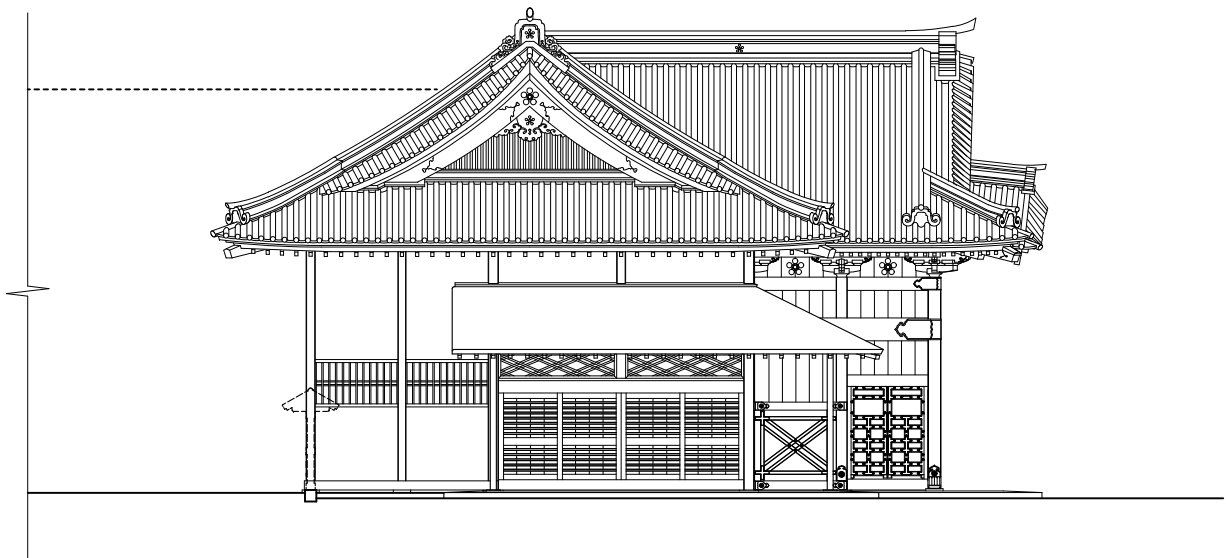
縮尺1/200

平面図

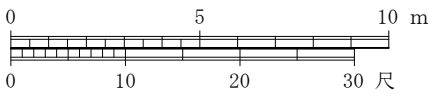
東立面図、南立面図



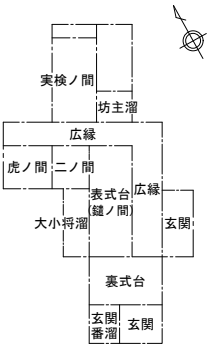
東立面図



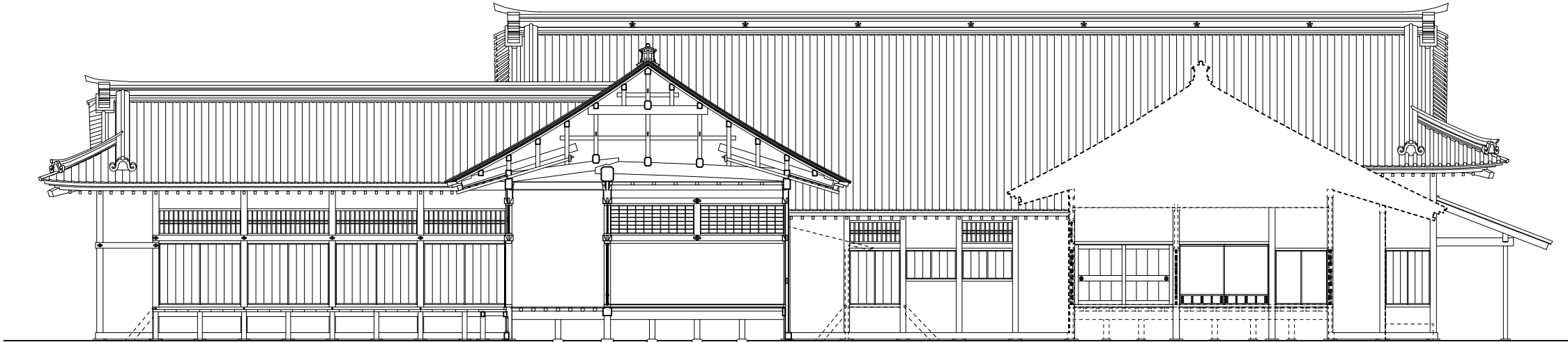
南立面図



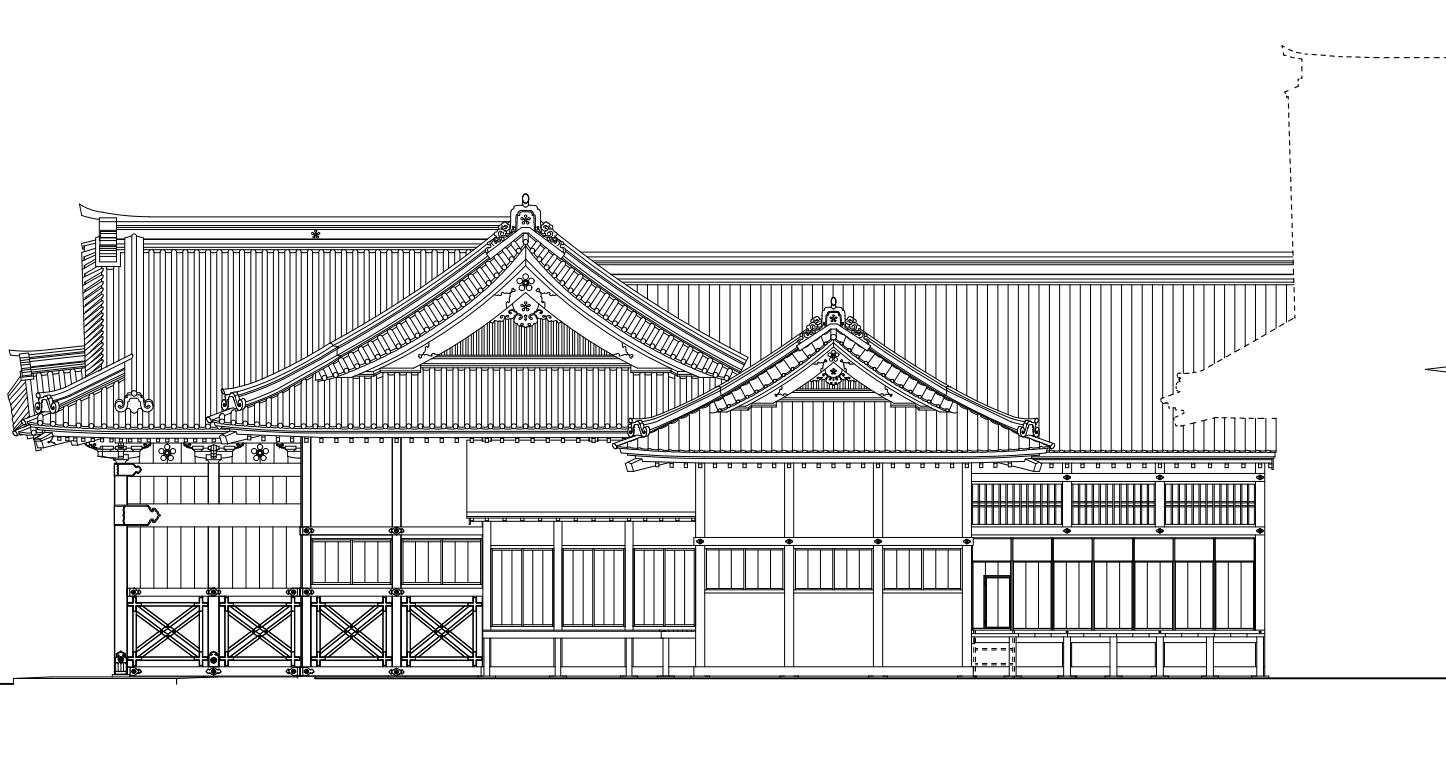
縮尺1/200



西立面图、北立面图



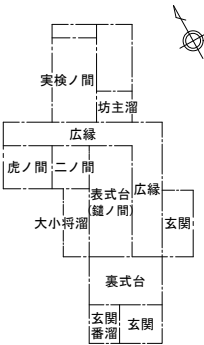
西立面图



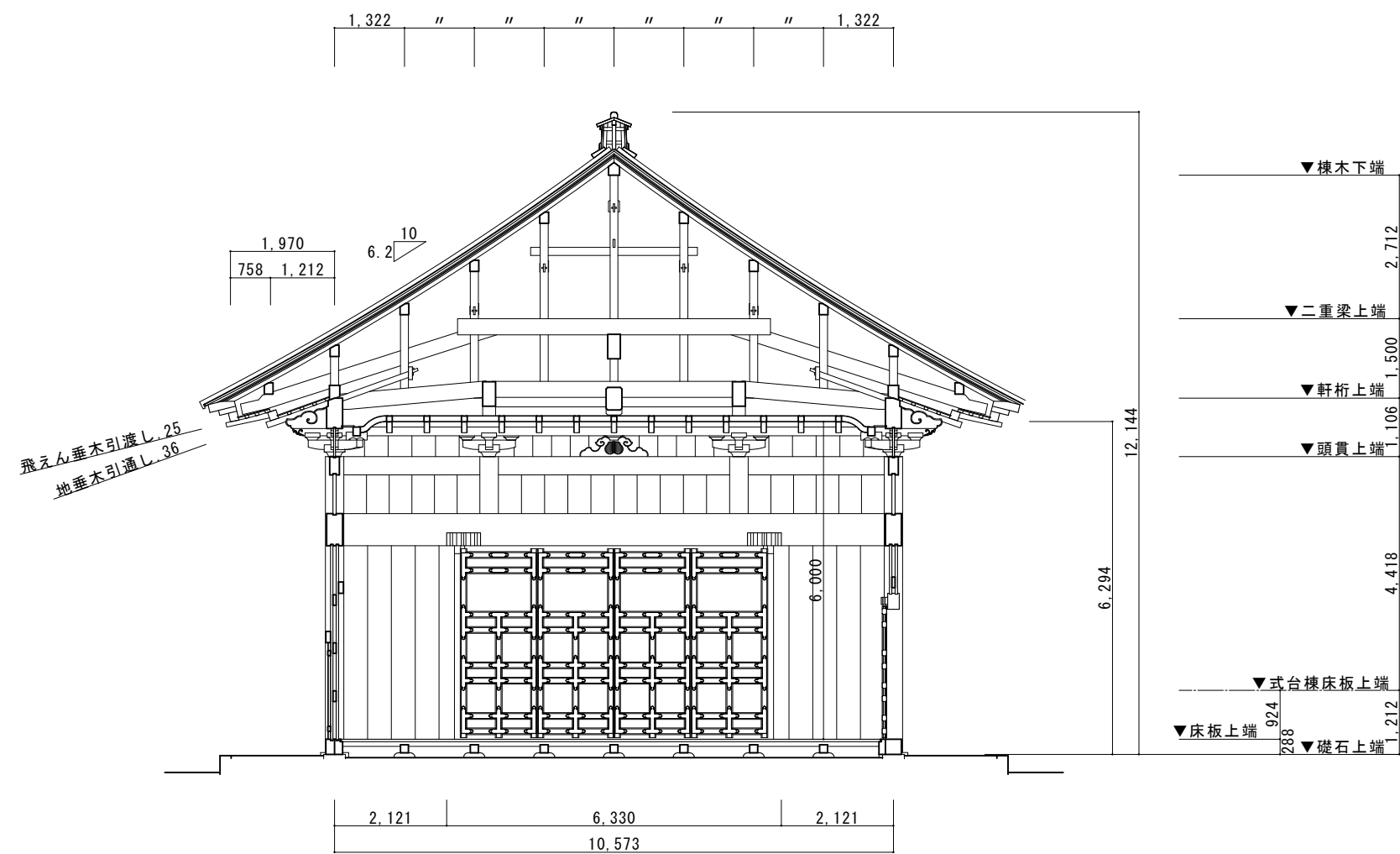
北立面图



縮尺1/200



玄関棟 梁間断面図

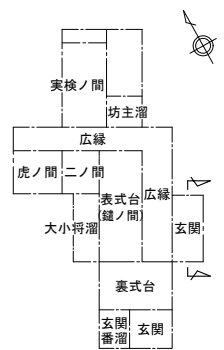


玄関棟

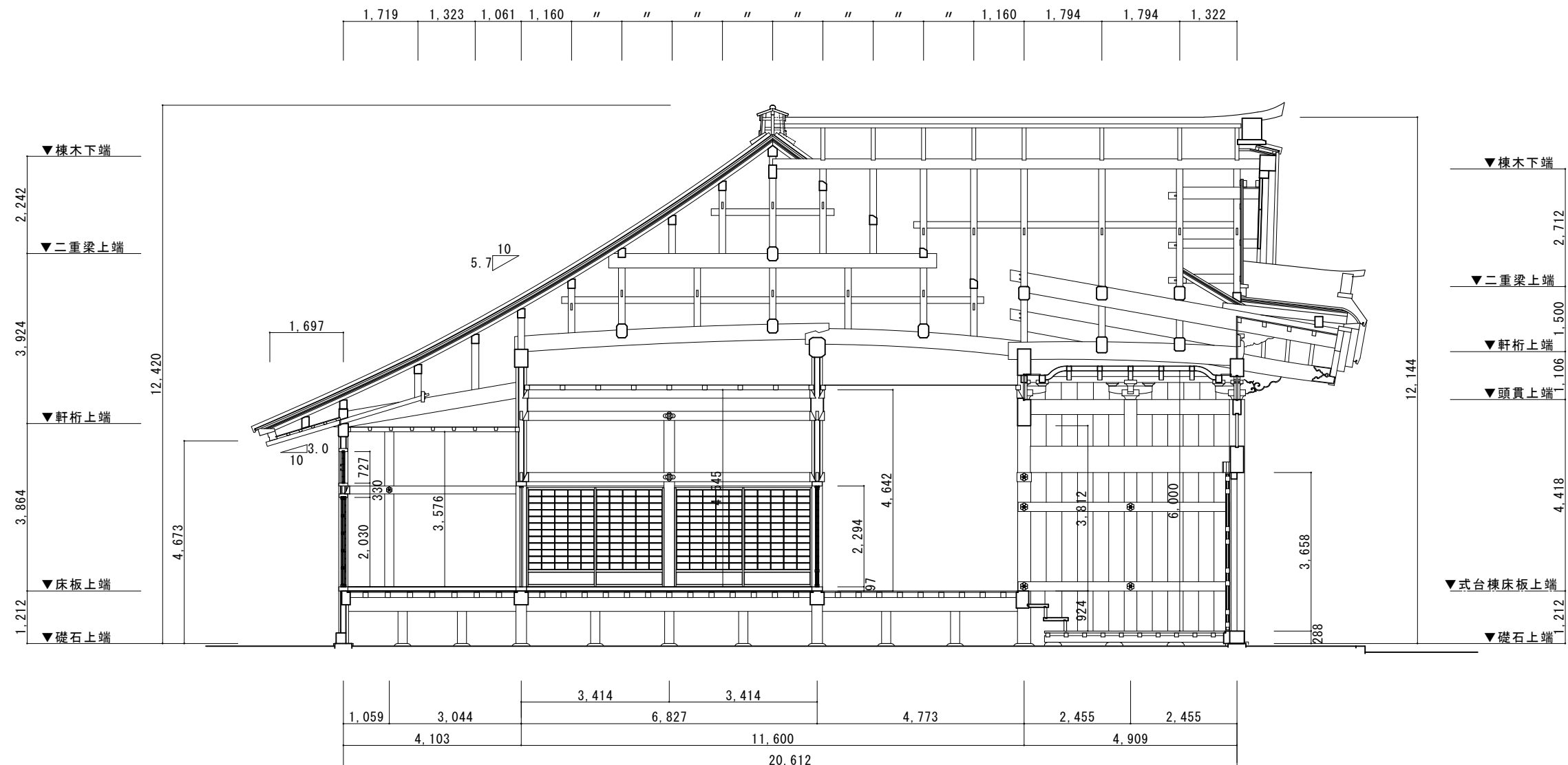
梁間断面図



縮尺1/120

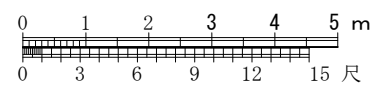


玄関棟 桁行断面図

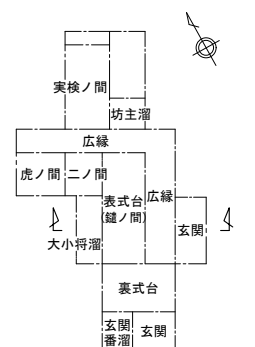


棟関・台式

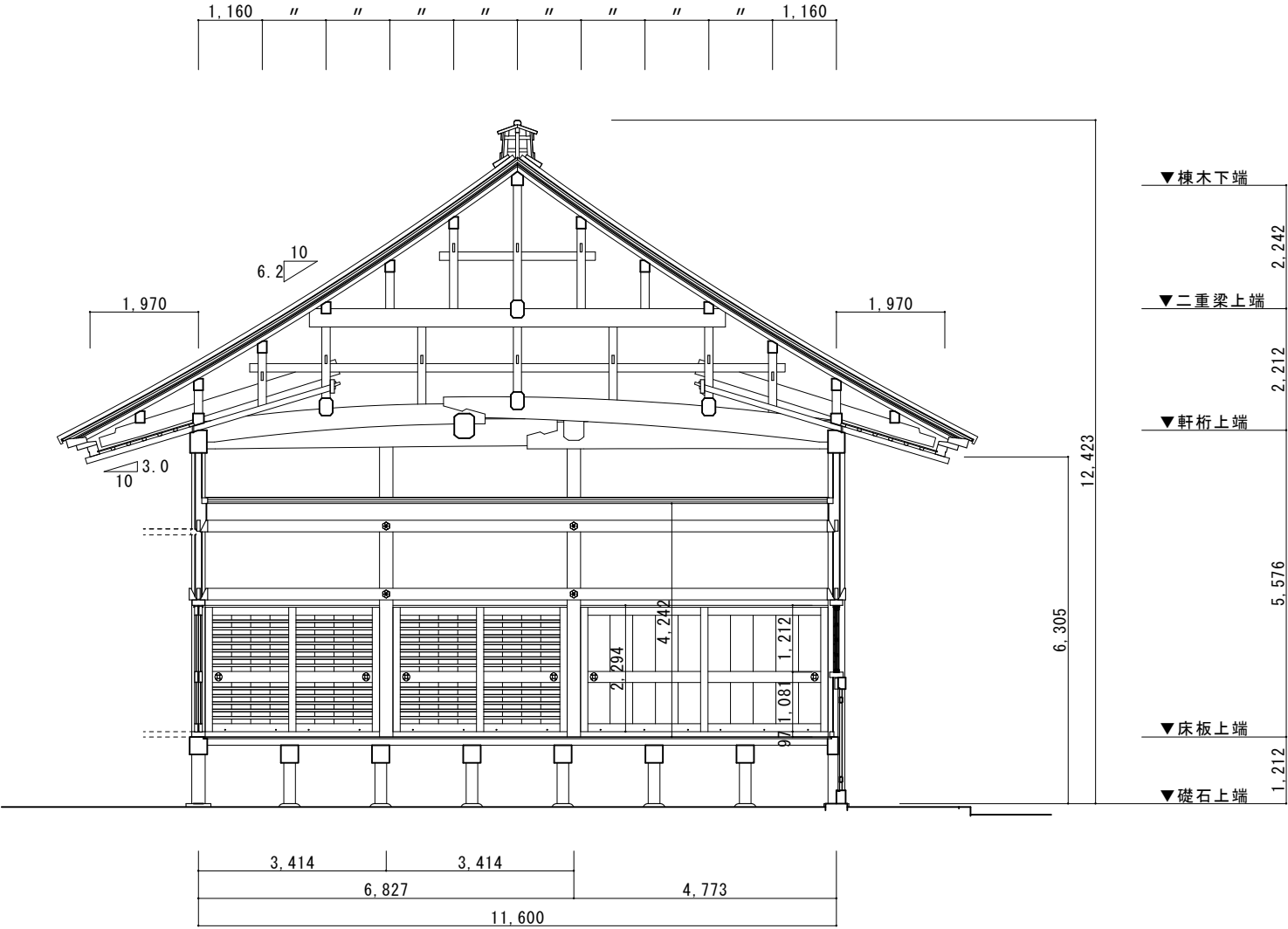
桁行断面図



縮尺 1/120



式台棟 梁間断面図

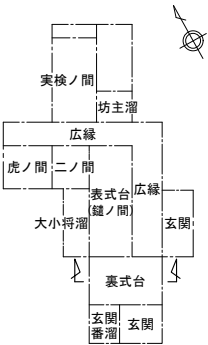


式台棟

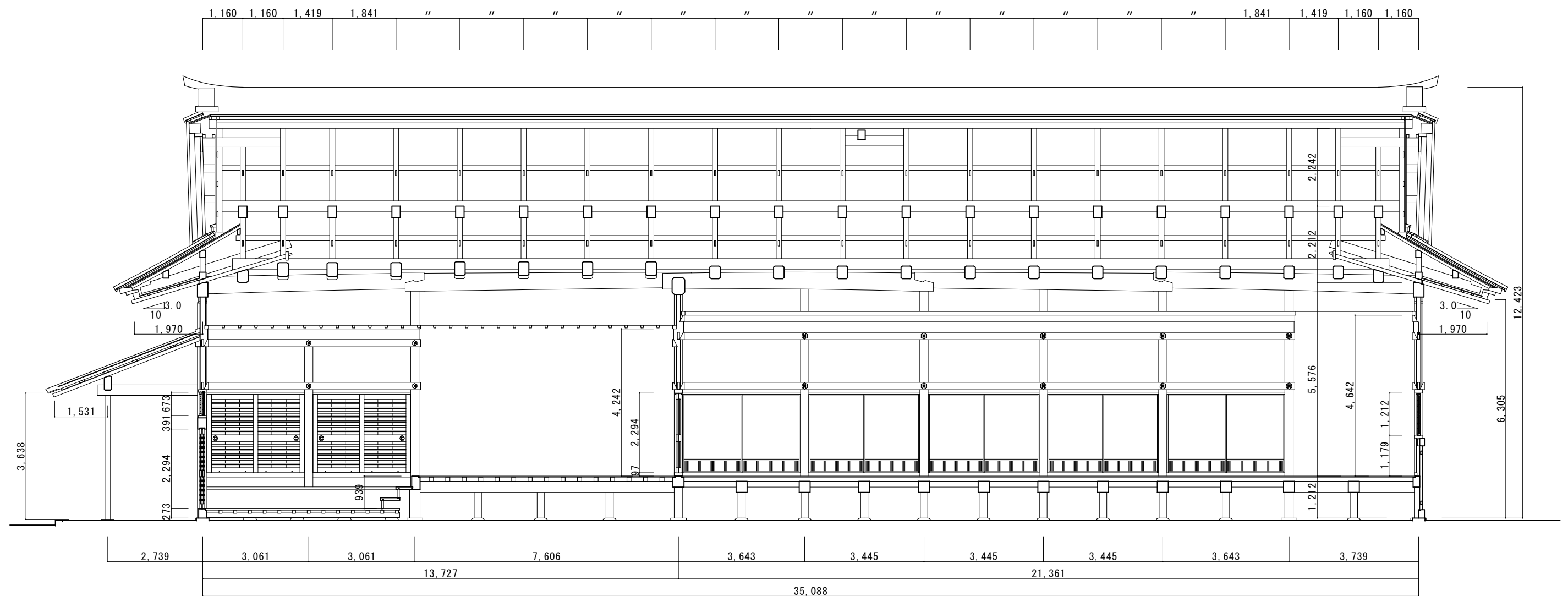
梁間断面図



縮尺 1/120

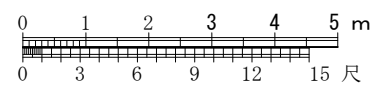


式台棟 桁行断面図

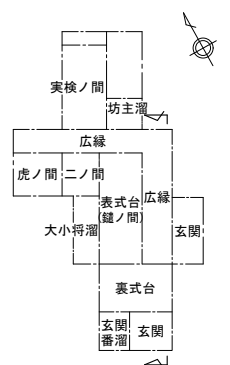


棟台式

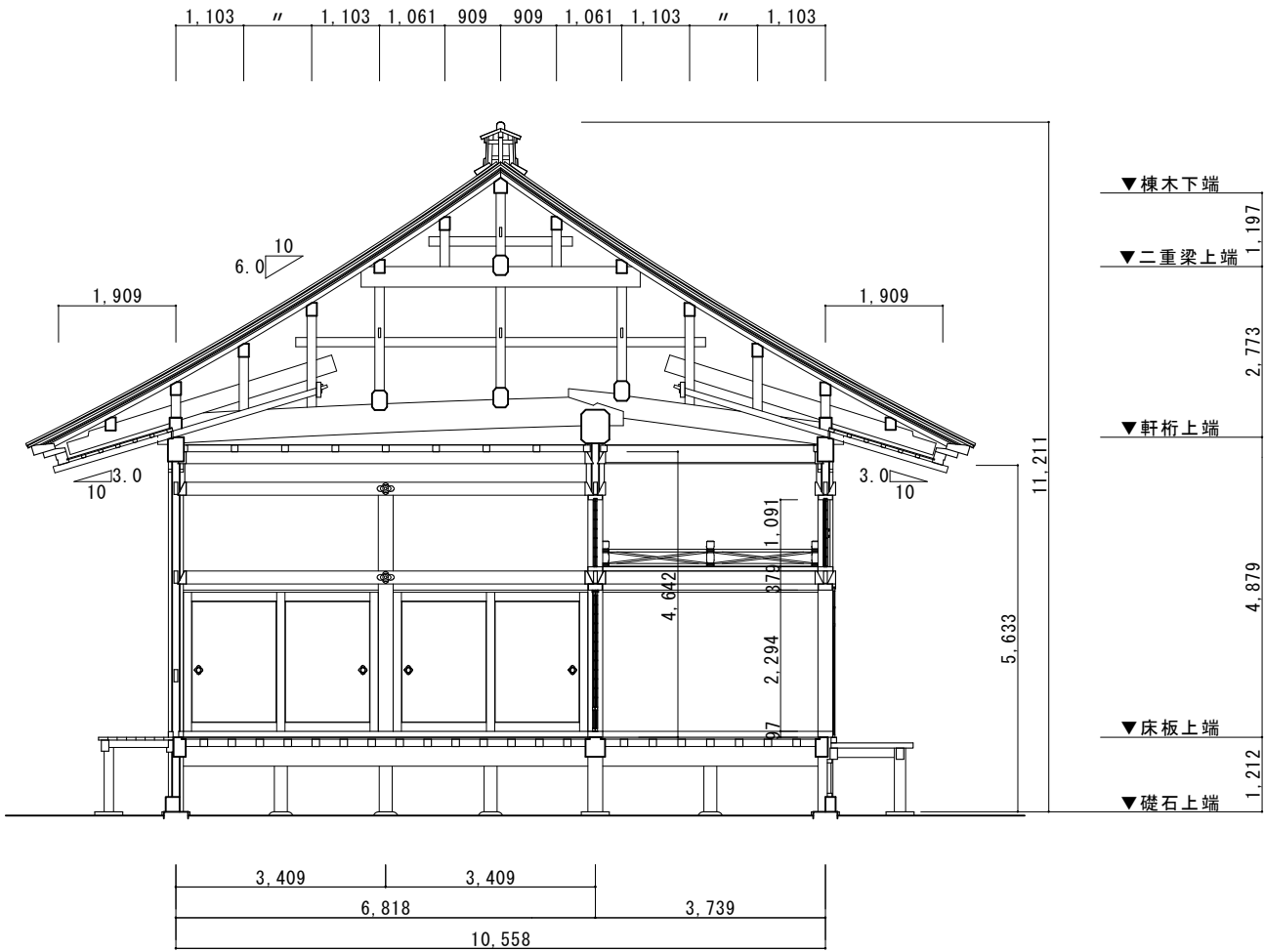
桁行断面図



縮尺 1/120



虎ノ間棟 梁間断面図

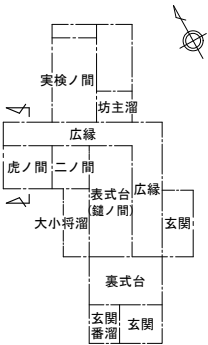


虎ノ間棟

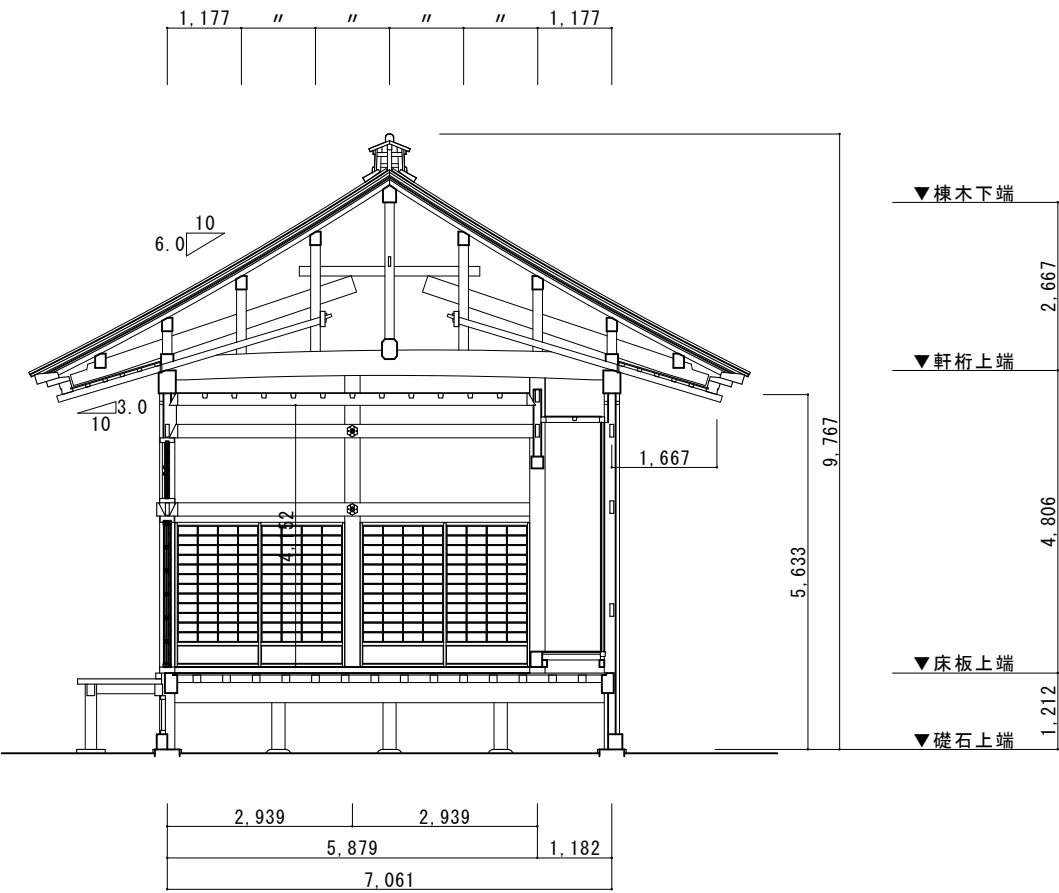
梁間断面図



縮尺 1/120



実検ノ間棟 梁間断面図

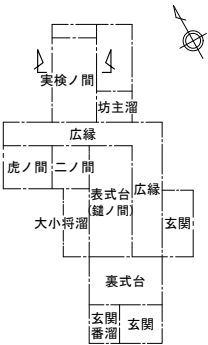


実検ノ間棟

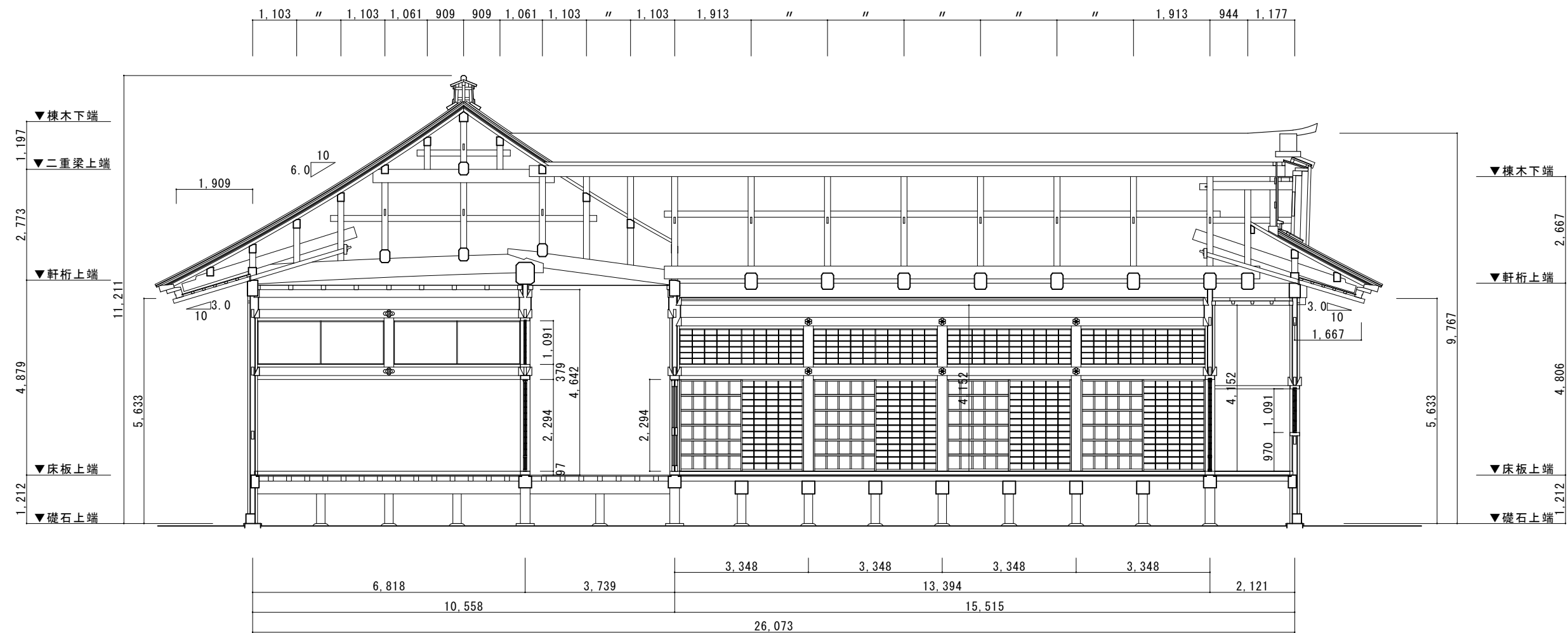
梁間断面図



縮尺 1/120

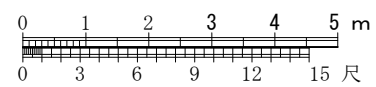


虎ノ間・実検ノ間棟 桁行断面図

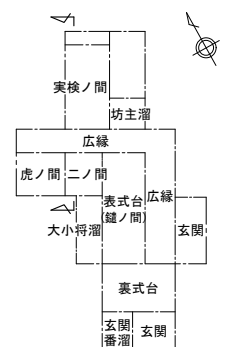


棟間・間ノ虎

桁行断面図



縮尺 1/120



障壁画の再現検討

令和4年12月27日

石川県

6. 障壁画の再現方針

（１）障壁画再現の趣旨

御殿の障壁画は、往時の文化や芸術への理解、また、御殿で行われた儀礼等において障壁画が果たした舞台装置としての役割を理解するうえで重要な意味を持つものである。

このため、復元整備の基本方針では、「御殿ならではの特徴の再現」として、「御殿の豪華絢爛さを特徴づけ、御殿ならではの装飾である障壁画、天井画、欄間等について、再現範囲を検討のうえ、史料から明らかになっている題材、作者、仕上げなどの情報を参考に、類例から意匠を類推するなど、史実を尊重した制作方法による再現を目指す」こととしている。

（２）調査・検討の体制

障壁画の再現に向けた検討は、学識者による絵画史的な検討だけでなく、制作技術の面においても往時の技法や、現代において再現しうる技術面の検討が必要となる。このため、学識者・学芸員・制作技術者を交えた以下のワーキンググループ体制のもと、資料調査や現地調査等を実施している。

氏名	所属等	専門分野、役職等
小 嵯 善通	成安造形大学教授（学長） （金沢城二の丸御殿復元整備専門委員会委員）	専門：近世絵画史 役職：京都御所障壁画修理指導 二条城二之丸御殿障壁画模写事業指導 文化庁文化審議会文化財部会専門調査会委員
荒 木 恵信	金沢美術工芸大学教授 （金沢城二の丸御殿復元整備技術アドバイザー）	専門：日本画、文化財保存、模写、絵画材料・修復 役職：石川県文化財保存修復工房運営委員 実績：平等院鳳凰堂板壁絵復元模写
中 澤 菜見子	石川県立美術館学芸主任	近世絵画史
鈴 木 彩可	学芸員	美術史
濱 岡 伸也	石川県立歴史博物館学芸主幹	近世史
中 村 真菜美	学芸員	近世絵画史
事務局	石川県土木部公園緑地課金沢城二の丸御殿復元整備推進室 絵画調査業務受託：（有）川面美術研究所（二条城、京都御所障壁画模写、熊本城障壁画復元）	

（３）二の丸御殿の障壁画に関する資料

これまでの調査により、複数の文献・絵図から御殿各所に描かれた障壁画（壁張付、襖、杉戸、天井画）の画題と絵師に関する文字情報が得られている。また、小書院格天井の天井画の実物が移築建築遺構と合わせて確認されている。他に、伺い下絵や写しなど、御殿に関連する可能性がある粉本資料が数点確認されている。

①文献

「二之御丸御殿内装等覚及び見本・絵形」 金沢市立玉川図書館蔵（加越能文庫）

再建に携わった御大工井上庄右衛門が記した御殿の仕様書といえる資料。一次資料として復元検討において信頼を置く史料。全ての障壁画について、位置、張付・襖と杉戸の別、画題、絵師、仕様が記載される。この中で各部屋の障壁画の画題や絵師、更に「彩色」、「惣金」、「墨絵」など仕様・仕上げの記載がある。

「御造営方日並記」 金沢市立玉川図書館蔵（加越能文庫）

造営奉行高島厚定が記した御殿造営の業務日誌といえる資料。障壁画制作に携わった絵師の行動や、藩から支給した紙・金箔など材料、画題選定や制作作業における絵師とのやり取りなど、障壁画制作のプロセスが克明に記録される。また、岸駒・岸岱が藩主に謁見した際の記録など、制作作業だけでなく絵師の待遇や藩との関係などをうかがわせる記録も多く見られる。上記仕様書の記載とも内容がほぼ一致する。

藩士等による記録

江戸期から明治期にかけての藩士等による複数の記録の中に、御殿の障壁画の意匠について触れたものが部分的に確認される。

②絵図

「金沢城二の丸地図」 石川県立歴史博物館蔵

江戸後期の二の丸御殿の全体を描いた絵図。部屋を仕切る杉戸の画題と絵師が記載される。文献資料とも内容が概ね一致する。

③天井画の実物

「小書院格天井天井絵」 中村神社蔵

明治初期に御殿から移築され、現在は金沢市内の神社拝殿となっている小書院の格天井に張られていた天井画の実物が確認されている。

④粉本

江戸後期の御殿の障壁画制作には複数の絵師が参加しており、各絵師の家系、流派に伝わる粉本など下絵資料に、御殿に関連するものが見られる。

（４）二の丸御殿の障壁画に携わった絵師

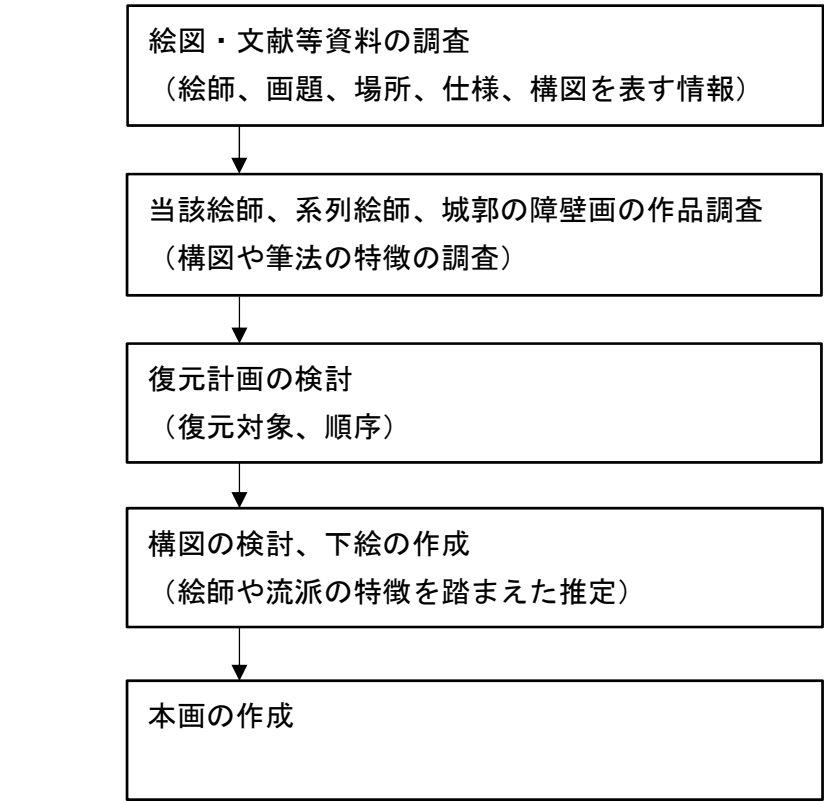
文献及び絵図から、江戸後期の御殿の障壁画に携わった絵師と、担当した場所を特定することができる。絵師には大きく分けて次の三つの系統があることが明らかになっている。このうち、表向の主要部など重要な部分を担ったのは、岸駒・岸岱父子と狩野祐益・墨川父子である。

- ・京から招いた岸駒・岸岱父子を中心とした岸派絵師（地元の絵師も含む）
主な絵師）岸駒、岸岱、村上松堂、望月玉川、斉藤霞亭、村東旭、森閑材、森辰之助
- ・江戸から招いた狩野祐益・墨川を中心とした狩野派絵師（表絵師、神田松永町狩野の系統）
主な絵師）狩野祐益、狩野墨川
- ・佐々木泉景、梅田九栄など地元の狩野派絵師
主な絵師）佐々木泉景、梅田九栄、早川泉流

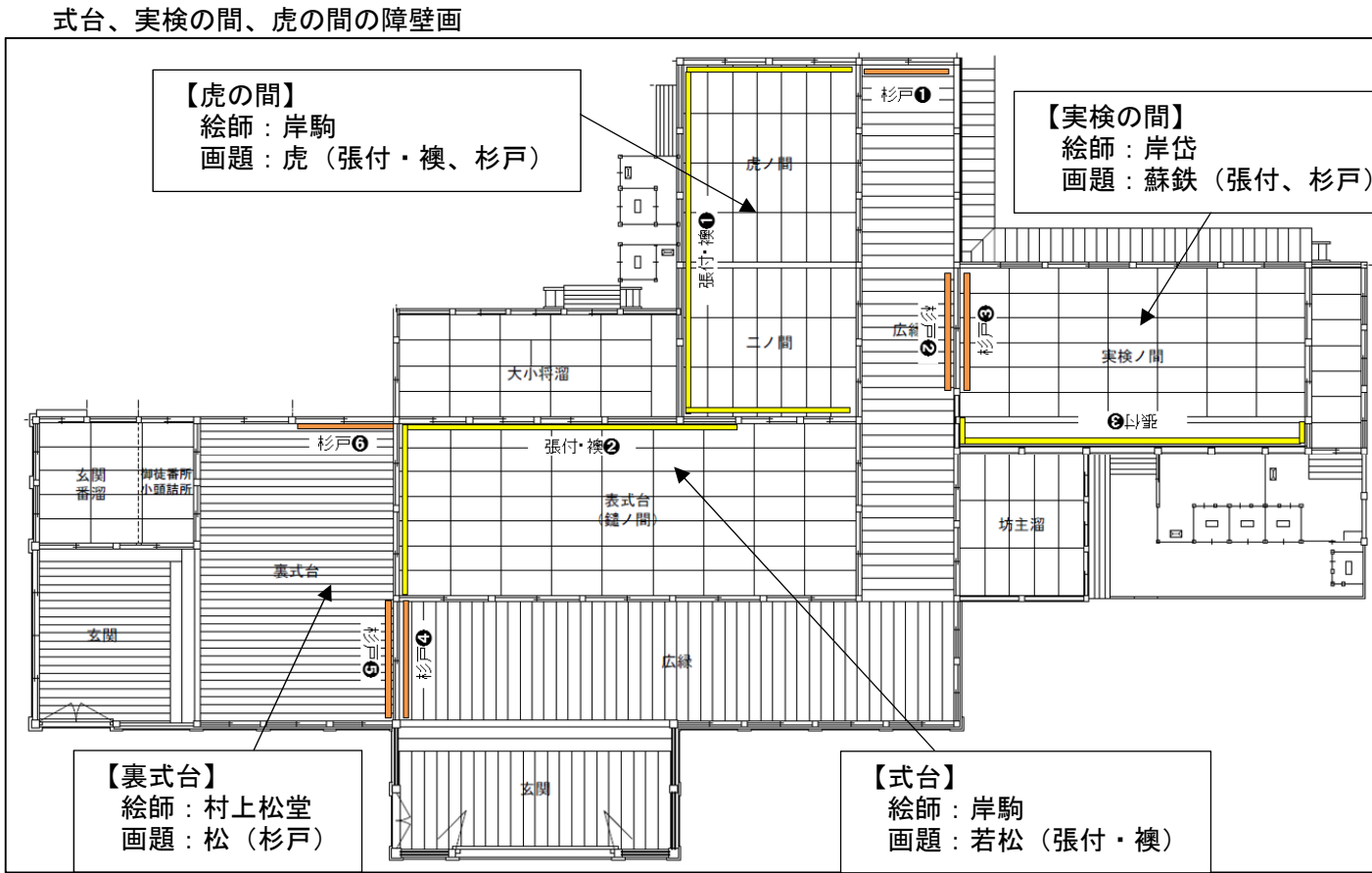
（５）障壁画の図様推定の方法

表向の障壁画の図様を図により示す資料は確認されていないため、（３）に記載する資料等から得られる情報に基づき図様を推定する推定復元を行うこととし、当該絵師の作品や、系列絵師の同画題作品、さらに江戸城など他城郭の障壁画の作例を調査し、絵師や流派の特徴について検討を深めることで精度を高める。

復元整備対象となる「表向」の主要部には、ほぼ全域にわたり障壁画等が見られるが、障壁画等の制作には長期間を要することから、推定復元の範囲、順序について建築計画との調整を図りながら取り組みを進める。



なお、復元の第１段階にあたる式台、実検の間、虎の間はいずれも岸派の担当部分であるため、岸派関連資料を優先して調査検討を進める。



復元対象の検討（第１段階整備）

復元対象の検討にあたっては、関連する絵師の作品調査により得られる情報量や、復元後の利活用における位置づけなどを総合的に検討し、対象を決定する。

例えば、岸駒が虎を描いた虎の間については、文献により５匹の虎が描かれ、「水を飲む虎」「走る虎」「うずくまる虎」など虎の姿勢に関する情報も得られている。京都御所など同一流派の作品において、類似する構図の虎の姿が見られるため、これらの作品の特徴を参考に、岸派が描く虎の構図の推定を行うことが可能である。

一方で、実検の間については、岸派による蘇鉄の作例が確認されておらず、現時点では障壁画の再現の優先度は低いものと捉えている。

このような調査検討を順次進め、推定復元の対象を確定させていく予定である。

（６）二の丸御殿に関連する資料調査の状況

文献

■二之御丸御殿御造営内装等覚及び見本・絵形（金沢市立玉川図書館蔵・加越能文庫）
（第１段階整備範囲の障壁画に関する記載抜粋）

御式台

御画

若松 彩色 但、御鑓之間 画師京都 岸越前助

裏式台

御杉戸、框草槇蠟色塗、板檀ヶ原杉柂目

御画

老松 彩色 但、表御式台境 画師京都 村上松堂

若松ニ鶴 同 但、大御廊下境 同 同人

虎の間

御張付惣金張

御画

虎 彩色 但、上之御間二之御間トモ 画師京都 岸越前助

御杉戸、框・帯トモ檜蠟色塗、板越中檀ヶ原伐出杉柂目

但、竹之御間境無帯

御画

虎 彩色 但竹之御間境実検之御間境トモ 画師 同人

実検之御間

御床之内三方御張付惣金

御画 蘇鉄 彩色 但御床之内 画師京都 岸筑前助

御杉戸、框・帯共檜蠟色塗、板檀ヶ原杉柂目

御画 蘇鉄 彩色 但御広縁境 画師 同人

■御造営方日並記（金沢市立玉川図書館蔵・加越能文庫）
（第１段階整備範囲の障壁画に関する記載抜粋【読み下し】）

一、実検之御間御張付、金張付に被仰付旨、御装束之御間御張付、金之野筋に被仰付旨、竹の御間、虎の御間、矢天井之御間金張付、竹の御間後御廊下金の野筋被仰付旨等被仰出、それぞれ関屋氏より井上庄右衛門へ被申渡事、

【実検の間の張付、金張付、装束の間の張付、金の野筋、竹の間、虎の間、矢天井の間は金張付、竹の間の後ろの廊下は金の野筋】

一、竹の御間初、御絵被仰付候ヶ所、御唐紙、御杉戸の上等、惣而有壁御張付に相成候分、軽ク御絵可被仰付旨、尤絵柄により、有壁之所御絵被仰付候而は、不都合に相成候所も可有之候間、猶左様之儀、相糺可申聞旨、申渡置候事、

【竹の間をはじめ、絵を描く所、唐紙、杉戸の上など、全て有壁張付になるところ、軽く絵を描くように言われ、絵柄により、有壁の所に絵を描いては不都合になるところもあると思われるので、検討するよう言われる】

一、表御式台御絵、萩の御間御絵、牡丹之御間御絵、実検之御間御絵等、此間伺のとおり可被仰出候事、右委曲、左のとおり、

【表式台の絵、萩の間の絵、牡丹の間の絵、実検の間の絵、詳細は次のとおり】

一、表御式台御絵、若松、越前介江被仰付候事、

【表式台の絵、若松、岸駒】

一、実検之御間岩に蘇鉄、右筑前介江可被仰付事、

【実検の間、岩にソテツ、岸岱】

一、竹の御間・虎之御間境之御杉戸、虎之御間之方は虎、竹の御間之方は、岩に八ツ頭、虎は越前介、八ツ頭は墨川被仰付候事、

【竹の間、虎の間の境の杉戸、虎の間の方は虎、竹の間の方は、岩に八つ頭、虎は岸駒、八つ頭は墨川】

一、実検之御間入口御杉戸虎、内の方は、岩に蘇鉄被仰付候事、

【実検の間入口の杉戸、虎、内側は岩にソテツ】

一、鷲の御杉戸越前介、表御式台若松の絵同人、ならびに芙蓉之間下絵のとおり、筑前介、実間之御間、岩に蘇鉄、同人江被仰付旨、それぞれ申渡事、

【鷲の杉戸、岸駒、表式台の若松も岸駒、また芙蓉の間は下絵のとおり、岸岱、実検の間、岩にソテツ、岸岱】

一、表御式台・裏御式台椽境表御式台之方、最前は老松に付、今般も老松にて、下草根笹岩取合可申哉、裏御式台之方、最前御絵無御座候得共、このたび右同様之御絵可被仰付哉、

【表式台と裏式台の縁の境、表式台の方、焼失前は老松だったので、今般も老松、下草、根笹、岩を取り合わせ、裏式台の方は、焼失前は絵が無かったが、今回は表と同様の老松でどうか】

一、実間の御間入口

御椽側之方、御絵相済居候御床之内、岩に蘇鉄に御座候間、右之趣取合、岩に蘇鉄可被仰付哉、

【実検の間入口、縁側の方、既に絵を描き終わった床の内が、岩にソテツなので、それと合わせて、岩にソテツではどうか】

十月二十四日に伺被仰出筑前介、岩に蘇鉄相調候事に極居申候、

【１０月２４日に岸岱に仰せ付け、岩にソテツでととのえることに決まる】

一、裏御式台広椽より御廊下入口

裏御式台之方、若松に鶴、御廊下之方、ト印に可被成哉、

【裏式台の広縁より廊下の入口、裏式台の方、若松に鶴、廊下の方、ト印（下絵に番号を付けている？）ではどうか】

一、表御式台・裏御式台・広椽境

裏表共老松に下草根笹取合　　筑前介

【表式台、裏式台、広縁の境、裏表とも老松に下草根笹取り合わせ、岸岱】

一、実検の御間入口

先達而被仰出置候岩に蘇鉄　　筑前介

【実検の間入口、岩にソテツ、岸岱】

■二ノ丸御造営留帳（才記家文書、石川県立歴史博物館蔵）

（第1段階整備範囲の障壁画に関する記載抜粋）

二ノ御丸御間画被仰付候人々、

虎御間　惣金張　岸越前助　京都

十間御間同■鉄画　同筑前助　同せかれ

御小書院　金砂子山水画　狩野友益　江戸　御扶持人

竹御間　惣金張　同　ト川　同せかれ

牡丹御間　同諸鳥　佐々木泉景　大聖持

矢天井御間　春草　□□松堂　御当地町画師

御小書院御天井　唐藤　梅田九栄

竹御間御天井　唐草　村　東旭旭　町画師

【虎の間　　惣金張　　　　　　　岸越前助（岸駒）　京都】

【実検の間　　同（惣金張）　蘇鉄画　岸筑前助（岸岱）　岸駒のせがれ】

一、御式台

御張附、惣金若松

御から紙、若松無地金等

御天井、金箔并あいろ形、さや形

【式台　張付、惣金若松、唐紙、若松無地金等、天井、金箔ならびにあい色、形は、紗綾形】

一、実検御間

御床はゝ七間、たけ二間計、惣金、そで御入口、御杉戸

御天井、さをふち板天井

【実検の間　床、幅7間、丈2間ばかり、惣金、袖入口、杉戸、天井、竿縁板天井】

一、虎御間

御張附惣金、虎ノ絵、都合五疋

内三疋御張付、岩木・老松等あしらい二疋ハ御杉戸二間ニ御床なし

同御廊下通御式台より矢天井御間さかへ迄御天井さや形、御式台同断

【虎の間　張付惣金、虎の絵、合計5匹、うち3匹は張付、岩木・老松等あしらい2匹は杉戸2間に、床なし、虎の間廊下通り式台より矢天井の間の境まで天井紗綾形、式台と同じことわり】

■南部祇知（ただとも）書取（明治22年）

（第1段階整備範囲の障壁画に関する記載抜粋）

・表御式台・・・天井金と藍の大さやかたはりへは　階上の御間三間に九間天井金と藍大さやかた格天井や御はりつけ御唐紙惣金地小山ニ若松の画也御塗懸ありて御鍵の間ニといふ　虎の間のさかひ杉戸板白木縁帯・小菱とも黒ぬり

【表式台　張付、唐紙惣金地、小山に若松の画】

・虎の御間上の間三間半四間二の間三間三間半　天井御鍵の間と同じ　御はり付等金地水石ニ虎はしるあり水のむあり踞るなとさまゝゝなり　△板の間をへたてゝ実験の間入口大杉戸の画外のかたハとら内ハ御はり付等金地蘇鉄の画杉戸も同　大床ニ寒夜中の霜等銘ある大長筒皆具共飾付あり　六間ニ八間なかゝゝと覚ゆ不慥　▲大広間広椽入口大杉戸画外ニて虎向ハ岩ニ菊いたゝき　欄間竹の節広縁十八間天井表御式台階上板の間の一のへなり

【虎の間　張付等金地、水石に虎、走る、水飲む、うずくまるなど様々なり】

【実検の間入口の大杉戸の画、外側は虎、内側は張付等金地、ソテツの画、杉戸も同じ】

【広縁入口の大杉戸の画、外側は虎】

・右のかた御懸物所うらのかた御省略所也　新口へ出ル廊下等ニて内のかた御歩横目うらのかた御小人頭溜也　裏御式台の高へ出る所の杉戸絵女竹ニ鶏　表御式台裏御式台階上ハ竹の大杉戸の画両面とも松也

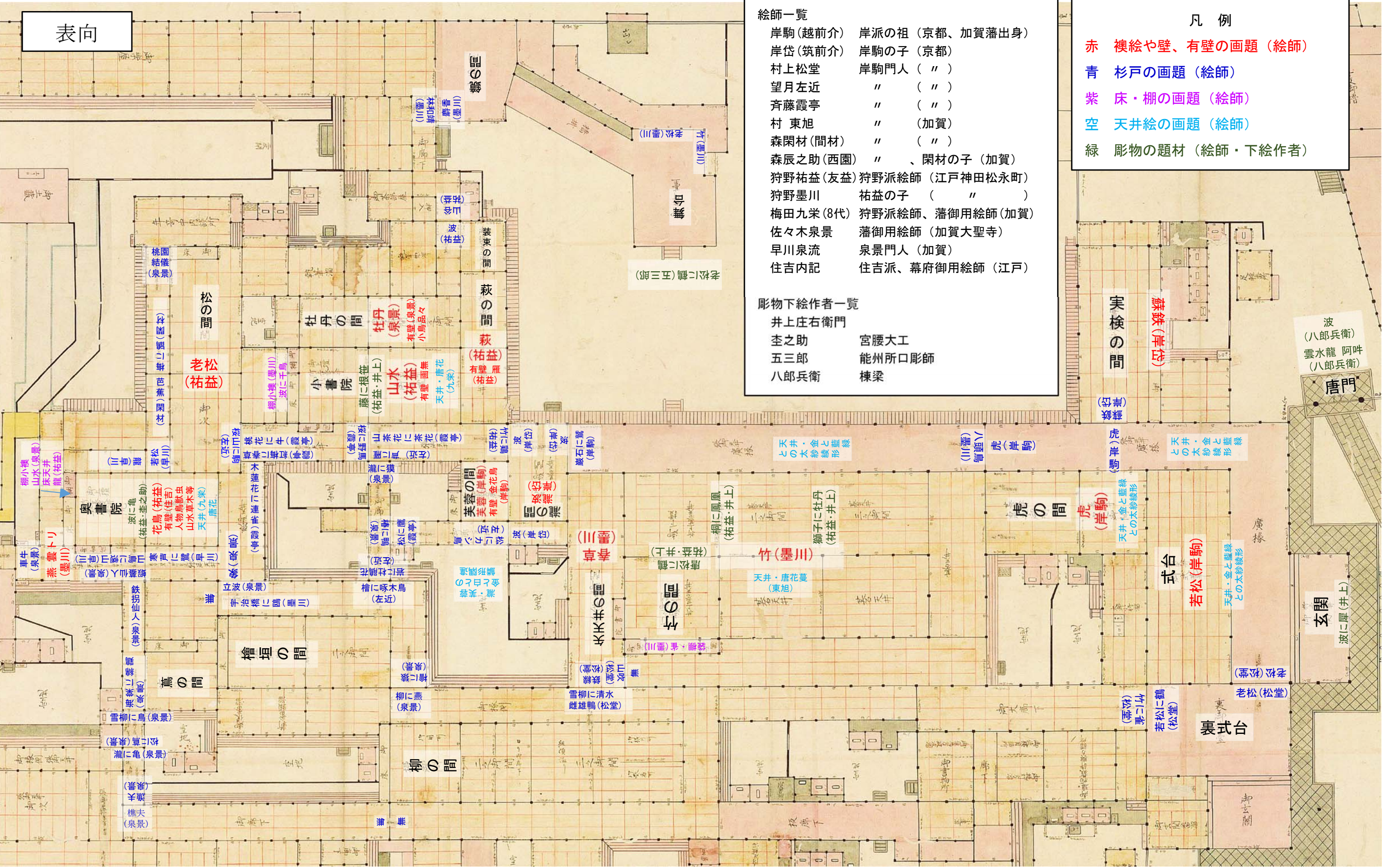
【裏式台の杉戸絵、女竹に鶏、表式台裏式台の杉戸の画、両面とも松】

■鶴村日記（文化7年5月）（白山市立博物館蔵）

（第1段階整備範囲の障壁画に関する記載抜粋）

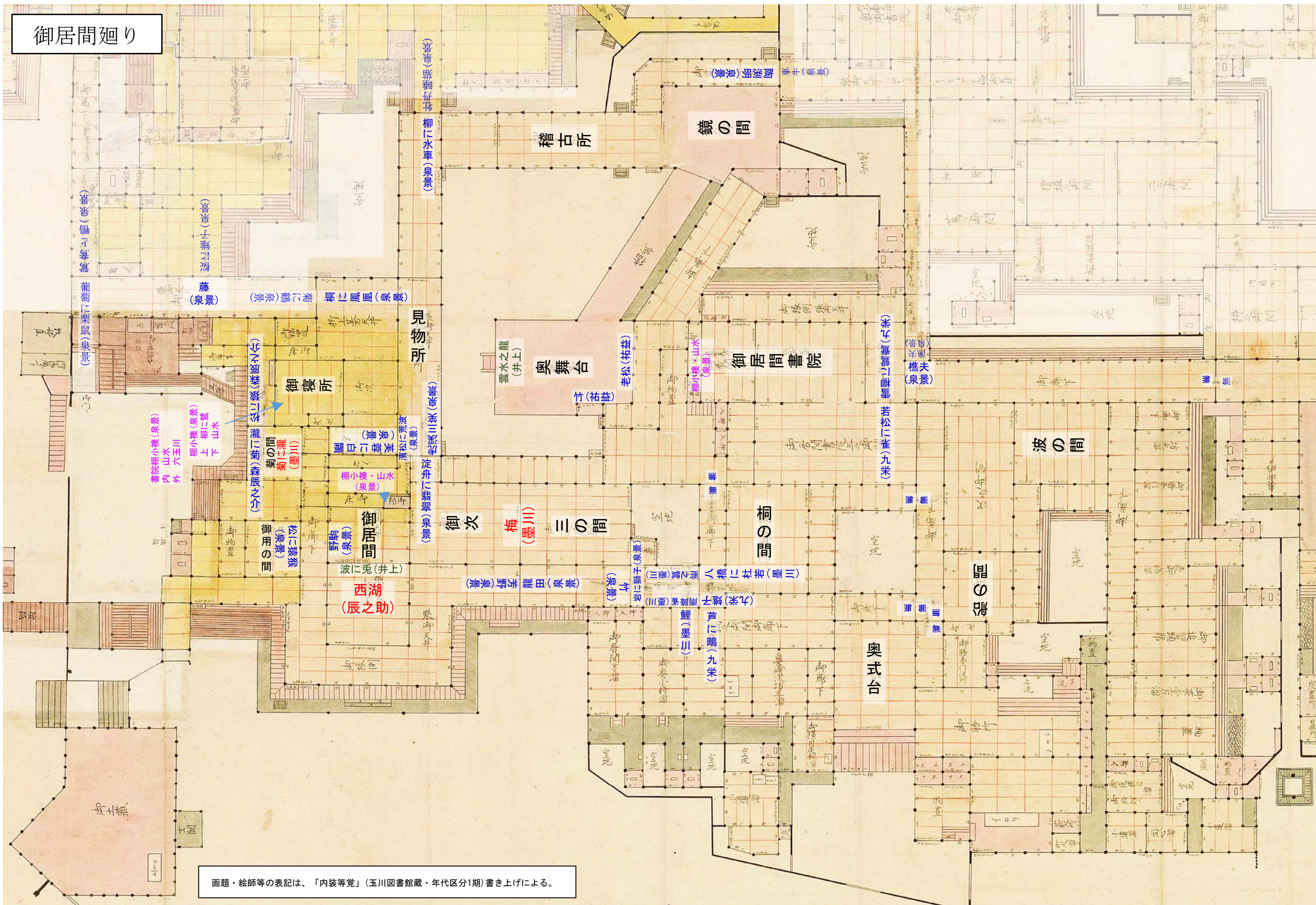
・廿日　晴天朝風寒し給ニよろし　朝之内九臈子旅宿宮久方江参る、四つ時過九臈生と京師之泉卓堂ヲ訪ふ　旅宿すか波屋、御城之御杉戸表は越前介虎ノ洞より走り出る図、裏者卓堂蘇鉄ヲ画ク

【城の杉戸、表は岸駒、虎の洞より走り出る図、裏は卓堂（岸岱の別号）ソテツを描く】

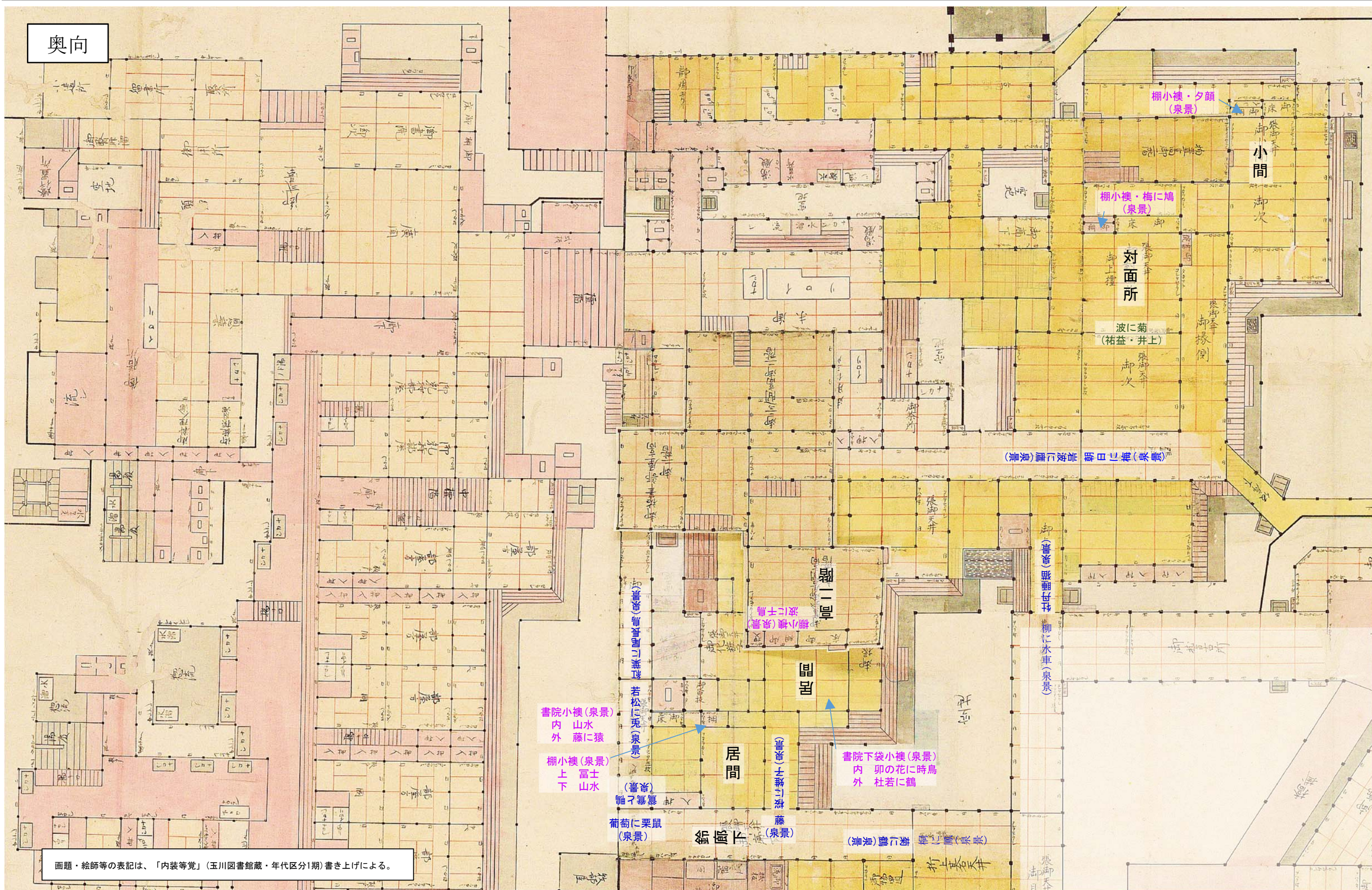


48図 金沢城二の丸地図（部分） 石川県立歴史博物館蔵

画題・絵師等の表記は、「内装等覧」（玉川図書館蔵・年代区分1期）書き上げによる。

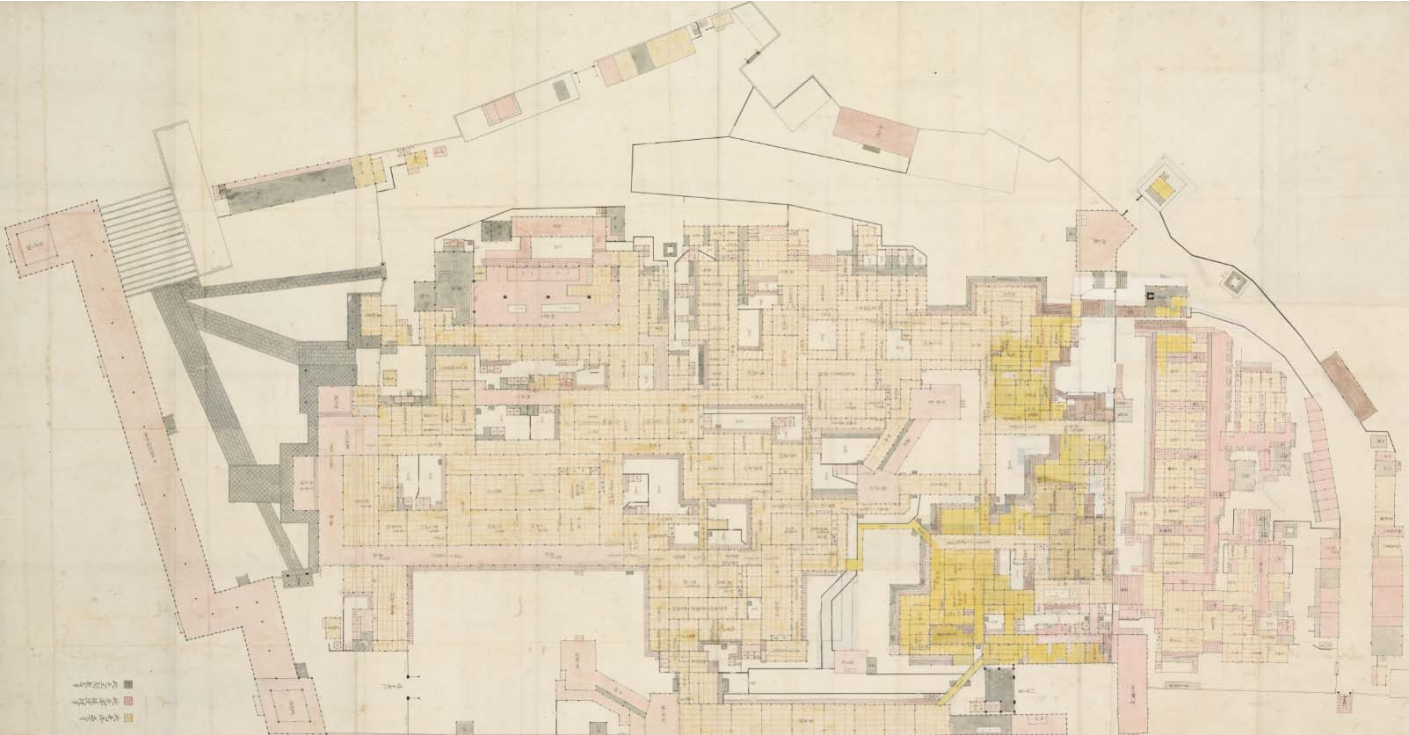


48図 金沢城二の丸地図（部分） 石川県立歴史博物館蔵



絵図

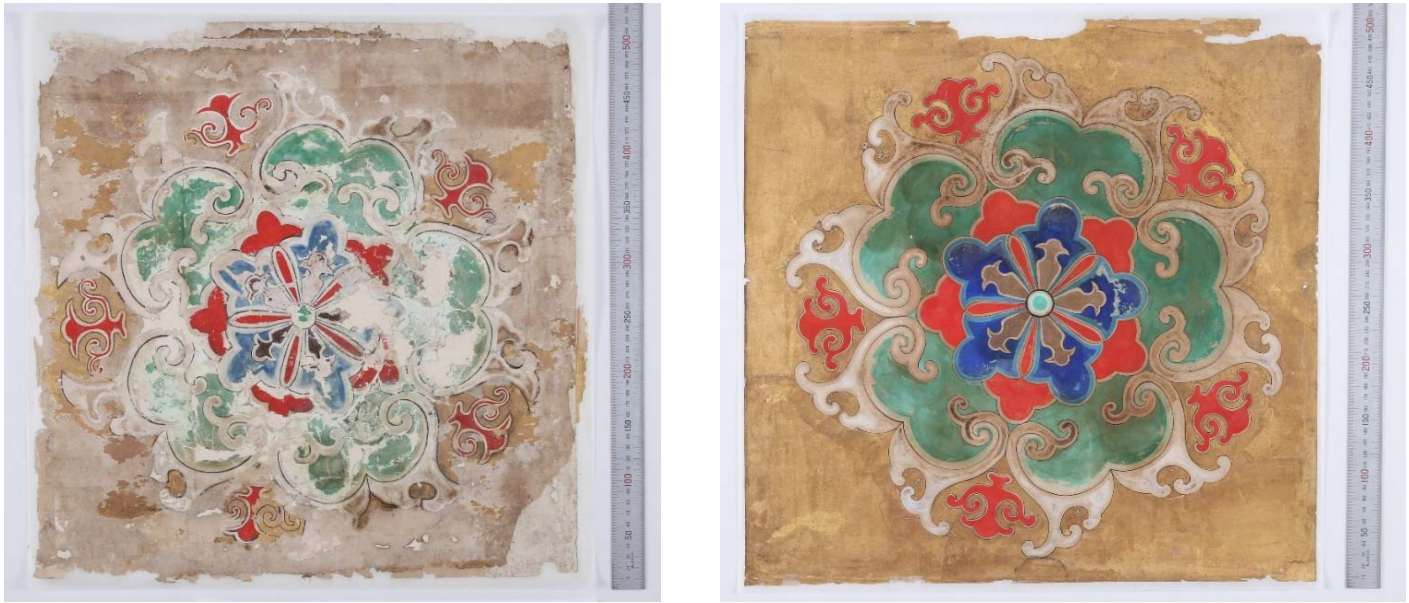
金沢城二の丸地図（石川県立歴史博物館蔵）



杉戸の画題と絵師が記載される。

天井絵の実物

御造営方日並記の記載から、梅田九栄が描いた極彩色の唐花と推測される。（中村神社蔵）



（7）当該絵師、流派の作品調査の状況

作品調査では、絵師の確かな作例で、金沢城の仕様との共通性が見られるものを対象としている。

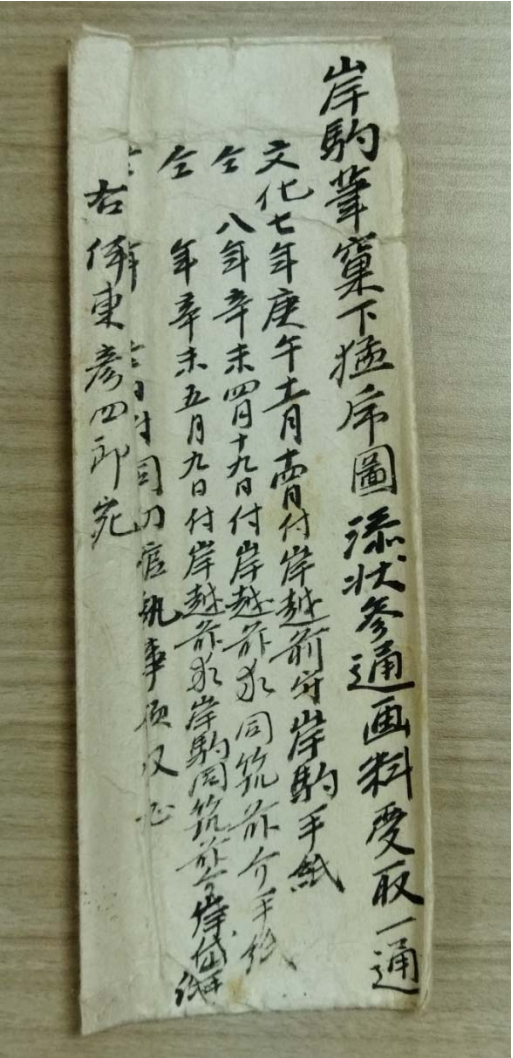
■宮川祭曳山「颯々館」楽屋襖「松虎図」（長浜市宮司東町自治会蔵）

曳山の楽屋襖に、金壁に松や虎が描かれる岸駒の代表作と言える作品で、制作時の記録も残る。色褪せ等もほとんど見られず保存状態も良好である。二の丸御殿建設の5年前の享保4年（1804）に描かれたものであり、筆致や色彩など虎の間の参考類例となるものである。



■窠下猛虎図（富山県朝日ふるさと美術館蔵）

岸駒による虎の掛け軸。二の丸御殿の再建時に寄附を行った地元有力者が加賀藩を通じて岸駒に依頼したもので、二の丸御殿建設の2年後の文化8年（1811）に描かれ、岸駒の作品によく見られる構図である。



岸岱による添え書きが確認できる

■京都御所諸大夫の間襖

岸岱による虎の障壁画。水飲み虎、蹲る虎、走る虎、松の取り合わせは二の丸御殿と共通する。麻、淡彩など仕様は御殿と異なるが、部屋全体に描かれた岸派の虎の障壁画として虎の間の構図の参考類例となる。

